

(2)講師及びスタッフによる評価

研修終了後、研修主催当事者として講師全員とスタッフによる研修プログラムの内容等の全体に関すること、各科目に関すること、研修運営に関することについて、アンケートを実施した。主に次のような意見や要望が挙げられた。

1)研修全体に関すること

①研修開催の趣旨について

- 昨年度の報告書で記載した内容をもとに、なぜ新たな内容を習得しなければならないのか、その内容は何なのかを明確にする時間を設けた方が良いのではないか。
- 法改正や養成課程の見直しについて説明がなされたものの、では一体、「新カリキュラムで新たに求められる社会福祉士とはどのようなものか」「これまでの社会福祉士とは何が変わり、何を新たに身に付けなければならないか」が十分説明されていなかったと感じる。
- 個々の講師の講演ではなく、日本社会福祉士会として社会福祉推進事業の実績をもとに日本全国の社会福祉士に対して発信することを念頭に、養成課程見直しで言う「専門職としての役割を担って行ける実践力」や、会の言う「地域共生社会の実現に資する…役割」「新たに求められる役割や機能」(「開催にあたって」)は、従来の社会福祉士とは何が同じで何が違うかを具体的なコンピテンスとして示し、各講義との対応関係を示す必要があったのではないか。

②各コマの繋がりについて

- 科目間の繋がりや、なぜそれらを学ぶ必要があるのか等をそれぞれの講義の冒頭に再度説明すると受講者にもより分かりやすいのではないか。
- 研修企画の全体像をあらためて共有し、一つひとつの講義がどのようなつながり、研修全体の目的にどのようにアプローチしているのかを言語化しておく必要があるのではないか。
- 講師全員が(基本的に)全プログラムに参加するスタイル(他のオムニバス方式の研修では、講師が自分の出番しか参加しないこともある中)の良さを活かすため、各講義間のつながりをもっと持たせてもよかったのではないか。たとえば、「〇〇先生が言った～～は、ここで言っていることと同じ」とか、講義間の関係をプロットした図で示す(他の研修で採り入れている)など。それにより、受講者も、各講義の学びをより関連づけて理解することができると思われる。
- 新旧カリキュラムの比較表や新しい「ソーシャルワーク機能」は示されているものの、それらと各講義・項目の対応を、改正の理念・目的に照らして示すべきだったのではないか。

③受講者の「コミュニティ・ソーシャルワーク系」と「レジデンシャル・ソーシャルワーク系」への対応について

- 「コミュニティ・ソーシャルワーク系」と「レジデンシャル・ソーシャルワーク系」の категорияがあることを前提に鑑みれば、「コミュニティ・ソーシャルワーク系」の受講者には身近に感じられるものの、「レジデンシャル・ソーシャルワーク系」の受講者にとってみれば多少縁遠いと受け止められたかもしれない。もちろん、両者は重複する部分が多く、基盤も共有されているため、どちらの話をして、援用して受け止めることが求められる。ただ、その援用のできない受講者のことを鑑みれば、「レジデンシャル・ソーシャルワーク系」の内容を少し追加しておく必要があるのではないか。

④演習について

- 演習を実施する科目については、演習での到達目標を明示しておく必要があるかもしれない。そのた

めには何をやるのかの明確化が必要と思う。しかし一方で大きなテーマの下(キーワードや話題の切り口などは提示しつつ…)自由にディスカッションできる時間もあるとよいと思う。

- オンライン研修の難しさを知ったのと同時に、どこでも研修が受けられるということで、時間と費用の面で助かる部分も多々あるのを実感できた。都道府県で研修を開催するにあたって、マニュアル等が必要になるのではないかな。
- オンラインの環境が悪いと、受講生の理解度も低くなる(環境にとらわれてしまい、集中して受講できない)可能性も否めないと感じた。今後、オンラインでの研修が標準となるのであれば、演習の工夫がより一層必要だと感じた。
- いずれの科目にも共通のことだが、演習の時間が短いというのが正直な印象。集合研修であれば、今回設定された時間でも十分かもしれないが、アイスブレイクも含めると、受講生の中には消化不良で終わってしまった人もいるのではないかと懸念している。
- 全体的に演習の時間を増やすと良いように感じた。
- 研修プログラムにロールプレイや事例検討を盛り込むことでより実践的な研修となるように感じた。
- 演習(ディスカッション)について、今回委員は介入しないというスタンスだったが、グループによってはファシリテーションがあった方がよかったのではないかな。これはグループの状況に応じてということだと思うが、どのような場合に必要か、どのように介入するかの指針を明記しておいてもよいかもしれない。もちろん、演習の内容にもよるので、個別に検討が必要だと思う。

2)各科目に関すること

①「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」について

- 時間配分を再検討する必要があるのではないかな。
- すべてに関係する科目なので、何の役割を挙げるかの検討及び確認ができるとうい。
- 地域共生社会の実現に向けて社会福祉士が担うべき役割や制度の概要とその中における社会福祉士の位置づけが明確でわかりやすかった。時間配分もよかった。
- 必要な内容が網羅されていたと思うが、時間不足も感じた。しかしこの科目のままであれば、これ以上の時間延長は現実的ではないので、もう少しコンパクトな内容でもよいと思う。
- 専門官による厚労省の施策の動向についてはこれだけで一つの講義として、後段の高良先生の担当部分は、次の講義とのつながりで再構成することを検討してもよいのではないかな。
- 今回は次の講義内容である「社会福祉士の役割」と「ソーシャルワークの役割」については重なりあう内容も多い中で、工夫していたと思う。しかし、社会福祉士の役割については、日本社会福祉士会として考える「社会福祉士像」を打ち出せるとよかったのではないかな。しかしそのためには、これらについてどこで協議し、整理したらよいのかなどの検討も必要であり、当該委員会だけでの対応を超えるものと思う。
- 改めて社会福祉士として確認すべき点、役割、理解しておかなければならない点について、講義で確認できたのは良かった。このテーマは、講義で「伝える」ことで、受講生がどこまで意識を持てるのかということが大事だと思った。

②「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」について

- 「ソーシャルワーク」の全体像を網羅的に把握できる内容だった。
- 地域共生社会の実現に向けて、社会福祉士が主体的に担うべき役割が明示されている点がとてもよかった。

③「地域アセスメントとネットワーク構築」について

- 演習の進行が丁寧で良かった(演習冒頭の自己紹介にきちんと時間をとり、アイスブレイクとしてお国自慢が含まれていることなど)。
- 自己紹介の際に、それぞれの名前の呼び方等がわからず、時間を要してしまったので、順番は受付番号順にした方がスムーズだと思う。
- 演習の時間が不足していたので、テーマを絞った方がいいのではないか。
- 2 日目の加山先生の講義内容とのすり合わせがよりできているとよかった。また、そのつながりを受講者にもより明確に提示できるとよかった。加山先生の担当の科目と続いている方が整理もしやすく、受講生もつながりがわかりやすかったのではないかな。
- 抽象度が高かったため、どれくらいの具体性をもたせるか、あらためて加山先生担当の 2 科目との調整が考えられる。
- 疲れている受講生を慮って緩やかな進行をしていただけたのが有難かった。理論の説明がわかりやすかった。演習時間も適切だった。

④「アドボカシーと意思決定支援」について

- 抽象的になりがちな内容(アドボカシー, 意思決定支援)について具体的に説明されていてわかりやすかった。
- テキストとしてのアドボカシーや意思決定支援の講義は必要だが、その上で社会福祉士の役割とのつながり、特に社会福祉士会としてのスタンスも示すことができれば良いのではないかな(これについても当該委員会だけの検討は難しいと思いますが…)。また、必ずしもガイドラインに沿ったものでなくてもよいので、意志決定支援の事例を入れた方がよかったのではないかな。
- 演習の時間が不足していたので、テーマを絞った方がいいのではないか。
- 意思決定支援のガイドラインの内実を丁寧に説明いただいたので理解が進んだのではないかな。

⑤「排除をつくらない相談支援体制の構築」について

- 他の講義に比較しても時間そのものが短かったため、演習も含まれていたためより短く感じた。講義が 50 分程度(60 分以内)はよいと思うが、演習は別途時間が必要だと思う。その際、排除を作らない相談支援のみで演習を設定するかどうか、検討が必要ではないかな。
- 50 分という時間では短かったように感じた。
- 演習を通じてポイントを押さえた良い時間だったと認識している。
- 講師の自己紹介に10分近くはかけすぎだと思う。
- 排除をつくらない相談支援についてはお話しされていたが、その体制についてもお話ししていただくの良いのではないかな。
- 演習の時間が不足していたので、テーマを絞った方がいいのではないかなと思う。
- 受講者から、自分がすべての相談を受けて支援をしなければならないと誤解している受講者が多くいたと、非常に危惧しているとの連絡があった。
- もう少しコマ全体の時間が長くて良いかなと思った。
- 排除を作らないというのは当然だが、実際には、支援者である社会福祉士自身が排除を作り出す可能性もあることを改めて学べたと思う。演習の時間が短かったため、消化不良になってしまったようにも感じた。

⑥「地域で支える体制の構築」について

- 興味深い事例の紹介がたくさんあり、飽きることのない内容で良かった。

- 演習の時間が不足していた。
- たくさんの実践事例は受講者にとって興味深かったと思う。
- グループワークについて、「個人ワーク」は Zoom 研修には向かない気がした。お互い画面は見えるものの、沈黙が続くのはしんどいようで、いきなり「グループワーク」を始めていた。
- 演習の時間が少なかったが、全国の多様な事例を示していただきとても理解が進んだ。

⑦「社会資源の活用・開発」について

- SWOT 分析という具体的な手法で演習を行えた点が良かった。
- 社会資源の現実的なかかわり方を起点に説明していただき、実践家としてもわかりやすかったのではないかな。
- (担当者の感想として)「資源開発」の脈絡に「福祉計画」を収めることは困難であった。どちらも濃い内容のものなので、別のテーマとすることを検討していただきたい。SWOT 分析はまったく時間が足りず、反省している。
- 受講生にとっても最も関心のあるテーマの一つであったと思う。当初から時間不足が懸念されていたが、演習も入れようとするとやはり無理があった。研修全体の時間配分にかかることであるので担当の問題ではない。演習時間については要検討項目のひとつだと思う。

⑧「ソーシャルアクション」について

- 実践可能なソーシャルアクションについて例示があり良かった。
- 丁寧な事例の準備、社会福祉士会の動きへの言及はよかったと思う。個人では取り組むことが難しいことでもあるので、このテーマでも演習(ディスカッション)があると、より自分事として考える機会になるのではないかな。
- 講義としてはわかりやすかったし、社会福祉士としての視点も学べたと思う。
- この科目があることによって、「再生産」と「再創造」にかかる全体のバランスがとれてとてもよかった。

⑨「アクションプラン」について

- 何を検討するかについて、委員会内でももう少し詰めておく必要があった。グループの演習ではあるが、個人のアクションプランを作るということであれば、課題の投げかけ方も工夫が必要であり、ワークシートも必要かもしれない。
- 明日から自分たちが何をしていくのかということを確認できたのは良かったと思う。ただ、オンラインで実施となると、まとめが難しかったように思う。ファシリテータは介入しなかったが、話し合いの内容が、本来の意図からずれてしまう可能性も否めなかったので、配慮と工夫が必要だと感じた。
- 個々のアクションプランを作ることは容易にできていたとともに、次の日からの実践につながると思ったが、発表に向けてグループでひとつの宣誓を合意する必要はないのではないかな。
- 演習の時間が余り、別の話をしていた。この時間を他のテーマの演習に配分してもよいのではないかな。
- 全てのグループに発表していただいた点がよかった。会場全体の一体感を得にくい Zoom 研修ではあるが、最後に一体感を醸成することができたように思う。
- すべてのグループの発表が聴けて良かった。また発表に対して丁寧にまとめていたのが好印象であった。

3) 研修運営等に関すること

①講師側の運営について

- 「手持ちのビジネス用小型 PC1 台」で講師の役割(スライドの画面共有を行いながらスプレッドシートを

閲覧し、必要に応じてブレイクアウトルームを訪問するというマルチタスク)をスムーズに行うことに難しさを感じた。

○講師は、ICT教育学専門家の栗田先生がヒアリングのときにされていたように複数のデバイスを手元に用意し、複数のアカウントで同時に Zoom にログインするなどの工夫が必要だと感じた。

○スプレッドシートは非常に効果的だと実感しました。

②機器について

○受講生側の通信環境の問題を感じた。(ウェビナーではなく)Zoom ミーティングをダイナミックに活用する今回のような研修では、「1Gbps 以上の固定の光回線」が必要ではないか。

○ブレイクアウトルーム間の移動によって、Bluetooth のスピーカーがその都度作動しなくなった。毎回、スピーカーの電源を入れ替えることで復旧した。

③今後の運用について

○オンライン研修を前提とした場合、1 コマ 90 分は長すぎる。講義は長くても 1 コマを 60 分程度で刻み、1 コマごとの間に休憩が必要ではないか。これは各講義の内容との関係でも検討すべきことだと思うが、オンラインの場合には、オンライン独特の疲労感を考慮すると時間枠を先に設定することも検討してよいのではないか。

○今後は、講義をオンデマンド、演習を Zoom で行い、アクションプランを提出してもらおうといったような、それぞれのメリットを活かした組み合わせの研修を検討する必要があるのではないか。

○オンラインでの研修運営の難しさを実感することが出来た。オンライン研修が標準化されるようであれば、都道府県レベルで研修を開催する際に、運営面でかなりの差が出てしまうのではないか。

(3)研修会前後の受講者アンケートの結果

1)調査の概要

○目的:

本研修では受講者に対して、研修前後に 2 回のアンケート調査を実施した。その目的は以下のとおりである。

1 点目は、研修の到達目標に対して、受講者自身の評価が研修受講の前後でどのように変化したかを把握することである。

2 点目は、2019 年度に実施した「社会福祉推進事業」のアンケート調査で質問した「ソーシャルワーク機能の実践・発揮状況」の 14 項目を活用し、これらの機能の保有状況についても受講者自身の評価が研修受講の前後でどのように変化したかを把握することである。

そして、これらの結果をふまえて今後の研修プログラム及び運営方法の質の向上に反映させることとした。

研修の到達目標(4 項目)とソーシャルワーク機能(14 項目)は、以下のとおりである。

<研修の到達目標>

- ①地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができる。
- ②地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できる。
- ③生活問題を抱えている(意識していない人も含む)人々に寄り添い、個人の支援だけでなく、地域にも視点を向けた地域づくりの支援が必要であることを理解できる。
- ④利用者からの複合化、複雑化した相談を断ることなく、適切に対応するために、必要に応じて他機関と連携することを理解することができる。

<ソーシャルワークの機能>

- ①側面的援助機能、②代弁機能、③直接支援機能、④教育・指導機能、⑤保護機能、⑥仲介機能、⑦調停機能、⑧ケア(ケース)マネジメント機能、⑨管理・運営機能、⑩スーパービジョン機能、⑪ネットワーク(連携)、⑫代弁・社会改革機能、⑬組織化機能、⑭調査・計画機能

なお、同時に受講者に関する基本情報及び受講動機、Zoom ミーティングを活用したオンライン研修等についても質問した。

○対象:本研修の受講者 63名

○方法:

オンラインによる研修という形態に合わせて、受講前・後共に、受講者に Google フォームによるアンケート調査の URL を配信し、受講者はこの URL にアクセスし、アンケート様式に入力(回答)・送信(提出)するという方法を採用した。

○実施時期:

研修前 2020 年 10 月 30 日～11 月 15 日

研修後 2020 年 11 月 23 日～11 月 30 日

○アンケート内容:

アンケートの内容は概ね以下のとおりである。

詳細は、別掲する「2020 年度地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク実践力養成研修(試行

研修)研修前・研修後アンケート調査」を参照。

I 受講者に関する基本情報

II 研修を受講した動機

* I IIについては研修前に調査した。

III 研修内容の到達度等に関する項目

① 研修の到達目標に関する項目

② ソーシャルワークの機能に関する項目

* IIIについては研修前後に調査した。

* 到達目標についての回答は「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法とした。

* ソーシャルワークの機能についての回答は「有している」「ある程度有している」「あまり有していない」「有していない」の4件法とした。

IV Zoom ミーティングを活用したオンライン研修について

① 各科目について

② 教材について

* IVについては研修後に調査した。

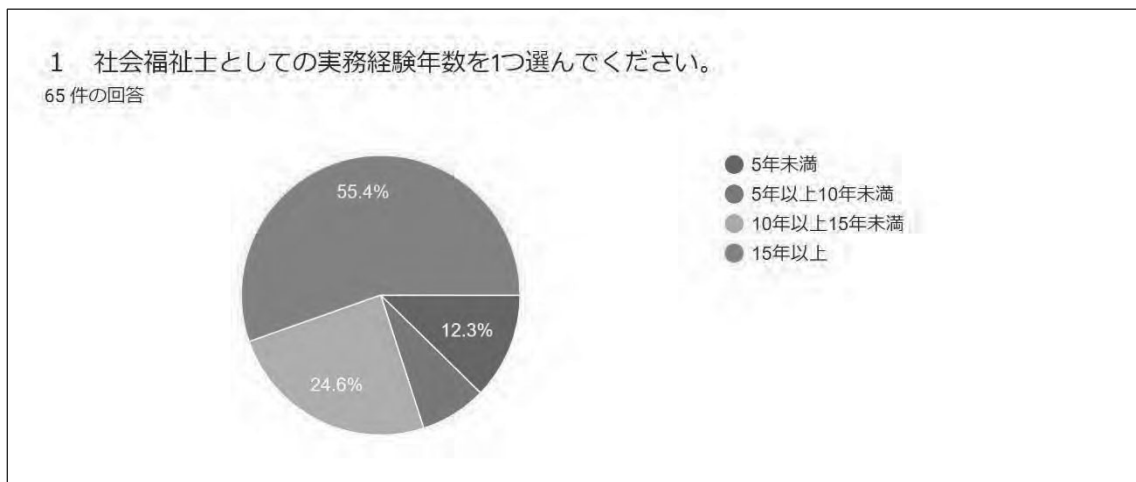
* どちらも回答は「よかった」「ややよかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」の4件法とした。

2)アンケート結果(単純集計)

○受講者に関する基本情報:

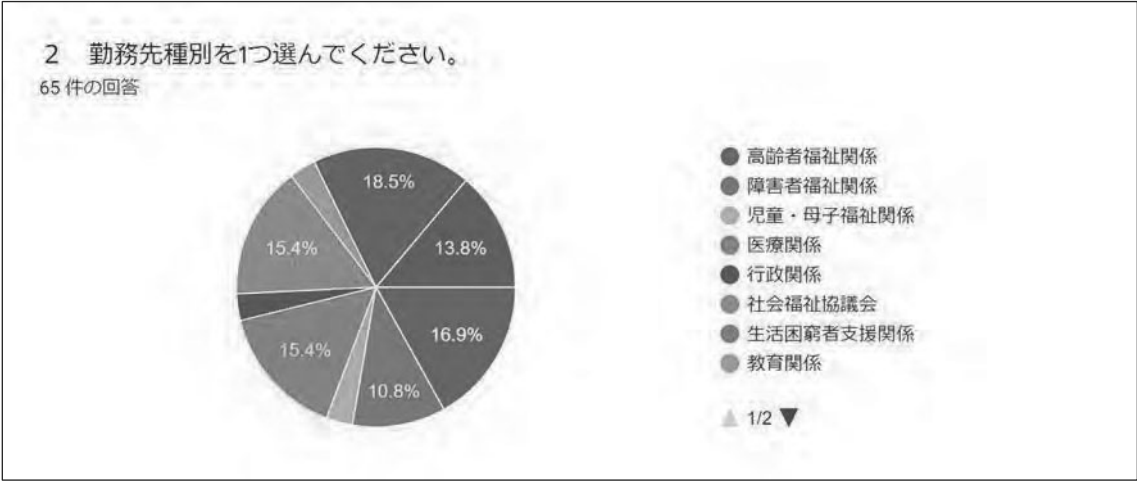
【社会福祉士としての実務経験年数】

「10年以上15年未満」「15年以上」の割合が80%であった。



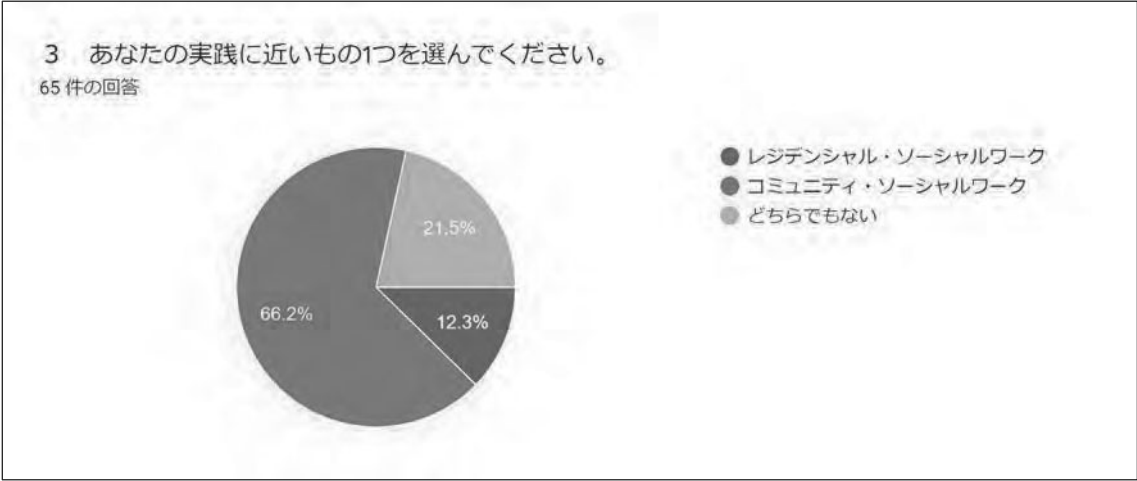
【勤務先種別】

「独立型社会福祉士」の割合が18.5%、「高齢者福祉関係」の割合が16.9%、「医療関係」「社会福祉協会」の割合がともに15.4%、「障害者福祉関係」の割合が10.8%であった。

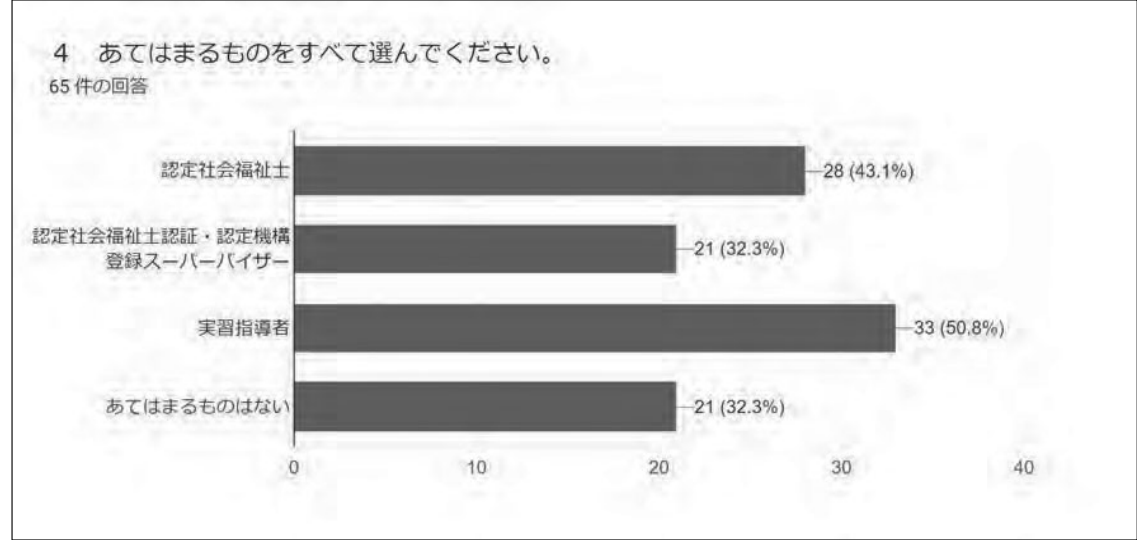


【実践に近い領域】

「コミュニティソーシャルワーク」の割合が 66.2%、「レジデンシャルワーク」の割合が 12.3%、「どちらでもない」が 21.5%であった。



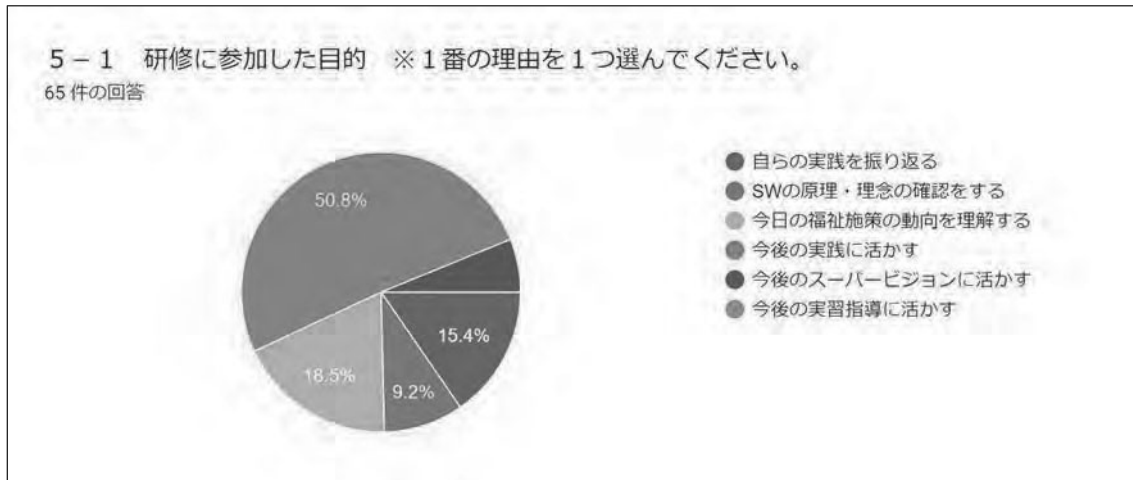
【認定社会福祉士等の資格等】(該当するものをすべて選択のため、合計が100%を超える)
「実習指導者」の割合が 50.8%、「認定社会福祉士」の割合が 43.1%、「認定社会福祉士認証・認定機構登録スーパーバイザー」の割合が 32.3%、「あてはまるものはない」の割合が 32.3%であった。



○研修に参加した目的:

選択肢は以下の5項目で、1番、2番、3番の理由を1つ選択。

1番の理由としては、「今後の実践に活かす」が50.8%と最も多かった。次いで、「今日の福祉施策の動向を理解する」18.5%、「自らの実践を振り返る」が15.4%、「ソーシャルワークの原理・理念を確認する」が9.2%、「今後のスーパービジョンに活かす」が6.1%であった。



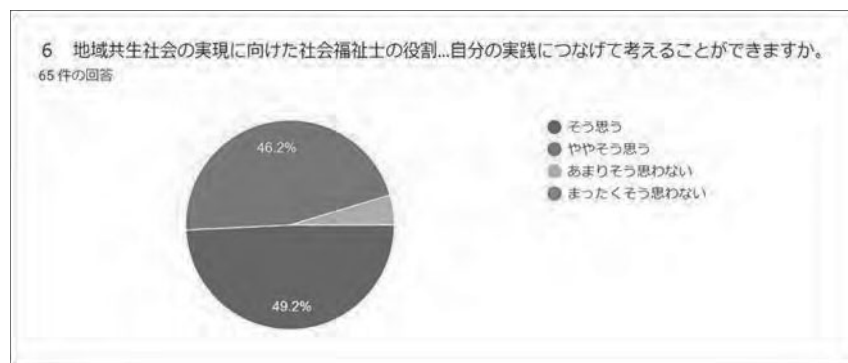
○研修の到達目標に関する項目とソーシャルワークの機能に関する項目についての研修受講前後の変化:

【研修の到達目標】

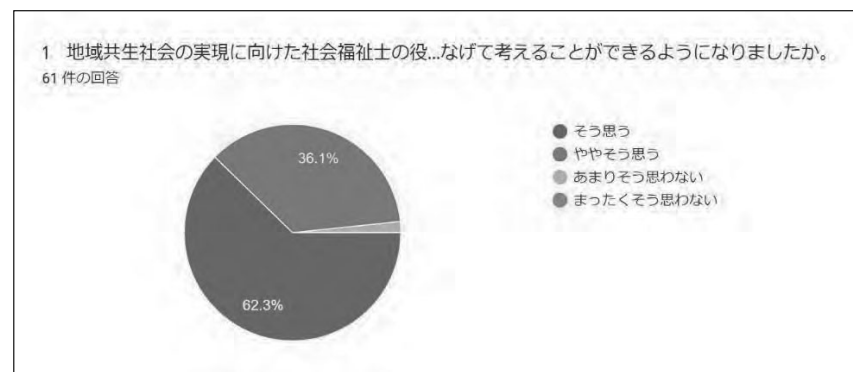
・すべての到達目標について、「そう思う」の割合が最も高かった。

・研修前に「そう思う」の割合が50%以下だった項目「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができる」と「地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できる」は、研修後にはどちらも「そう思う」の割合が50%を超えた。

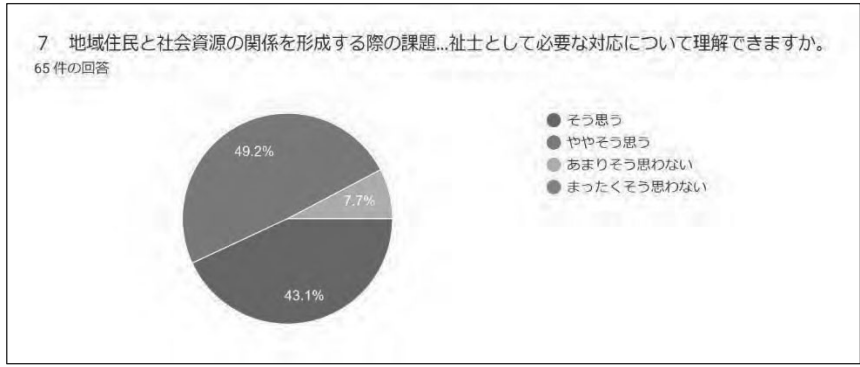
【研修前】



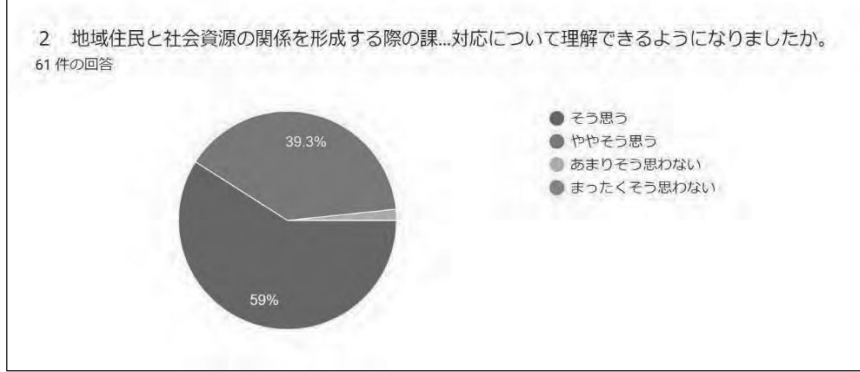
【研修後】



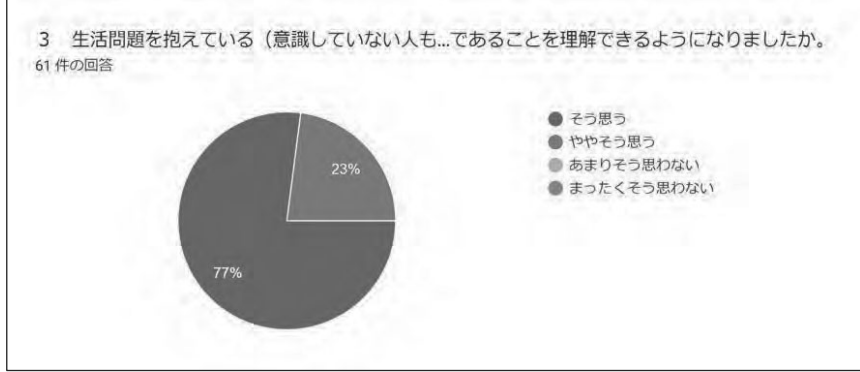
【研修前】



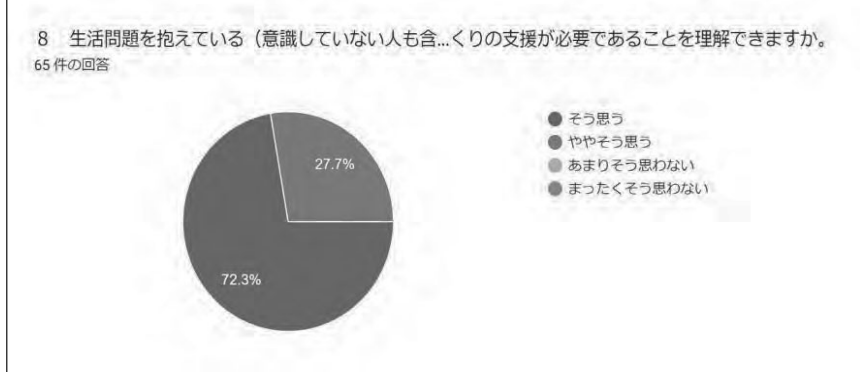
【研修後】



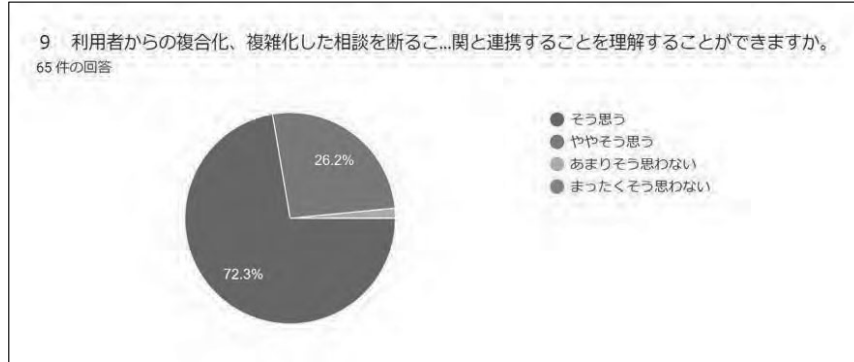
【研修前】



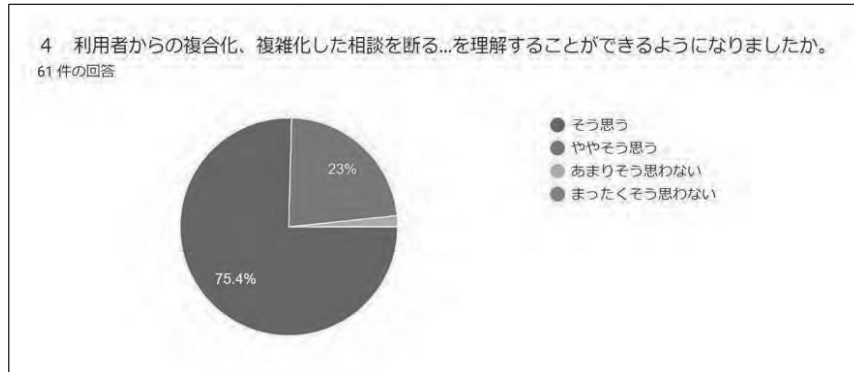
【研修後】



【研修前】



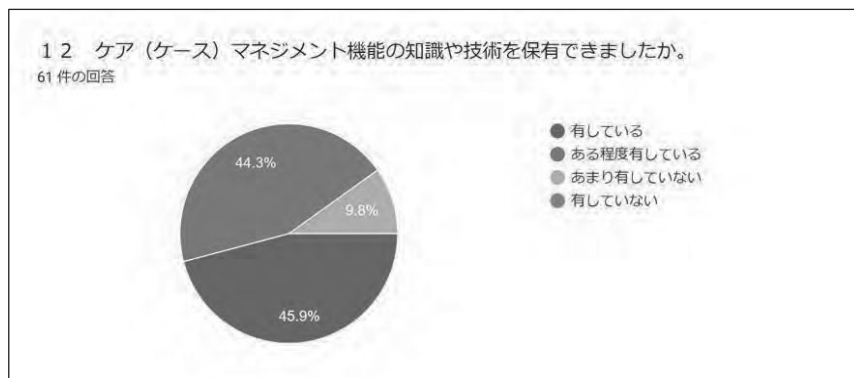
【研修後】



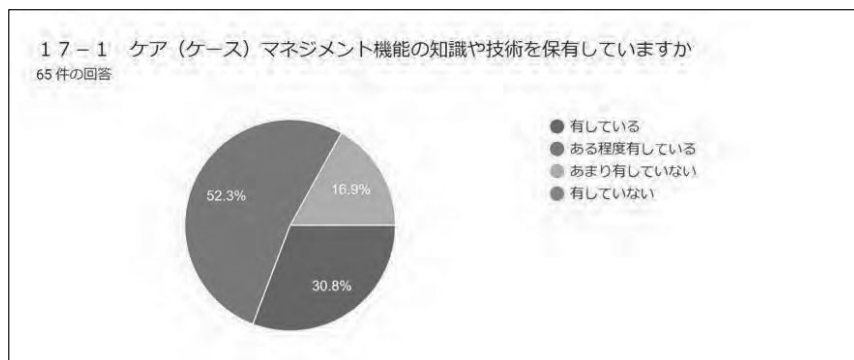
【ソーシャルワークの機能】

- ・14 機能の内 10 の機能について研修前後共に「ある程度有している」の割合が最も多かった。
- ・「代弁・社会変革機能」「組織化機能」「調査・計画機能」は研修前には「あまり有していない」の割合が最も高かったが、研修後には「ある程度有している」の割合が最も高くなった。
- ・「ケア(ケース)マネジメント機能」は研修前には「ある程度有している」の割合が最も多かったが、研修後には「有している」が最も高くなった。

【研修前】

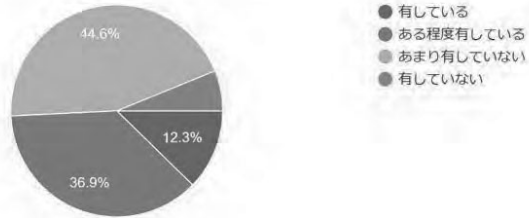


【研修後】



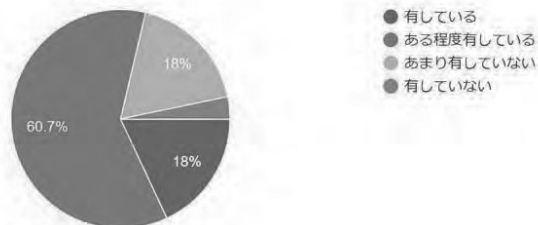
【研修前】

2 1 - 1 代弁・社会変革機能の知識や技術を保有していますか。
65 件の回答



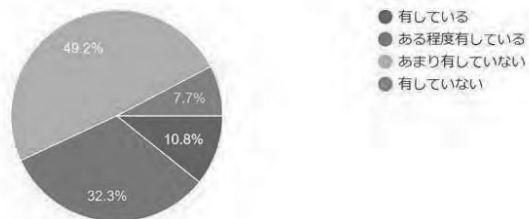
【研修後】

1 6 代弁・社会変革機能の知識や技術を保有できましたか。
61 件の回答



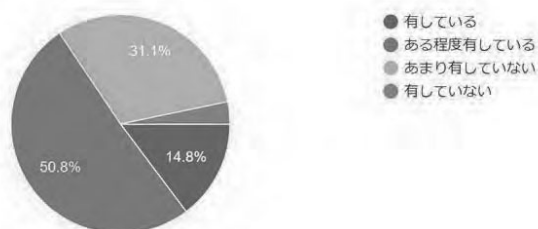
【研修前】

2 2 - 1 組織化機能の知識や技術を保有していますか。
65 件の回答

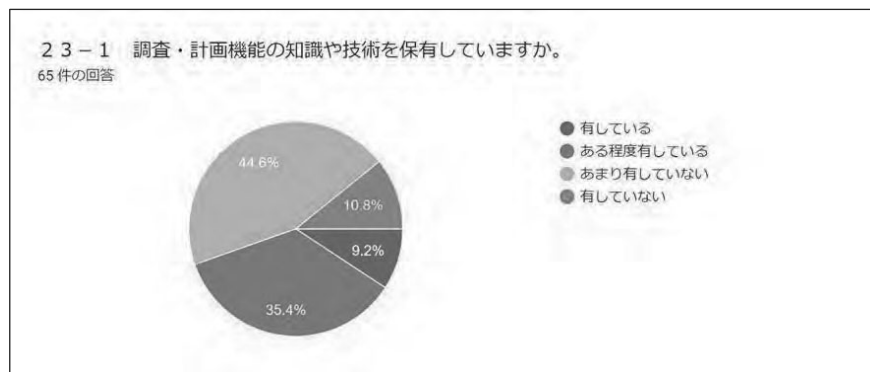


【研修後】

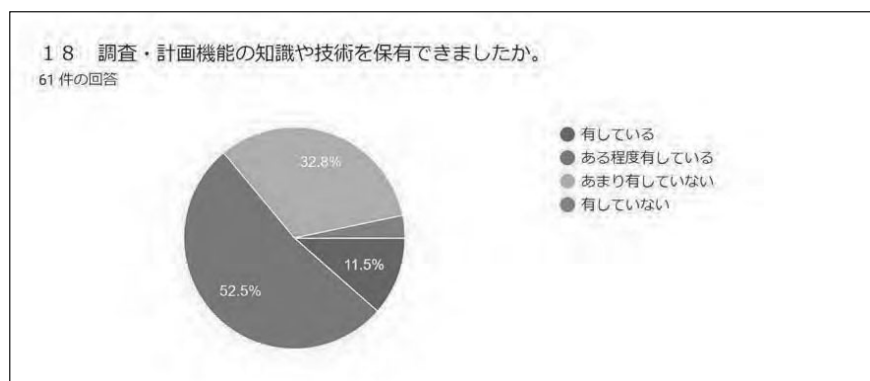
1 7 組織化機能の知識や技術を保有できましたか。
61 件の回答



【研修前】



【研修後】



○Zoom を活用したオンライン研修について:

【科目】

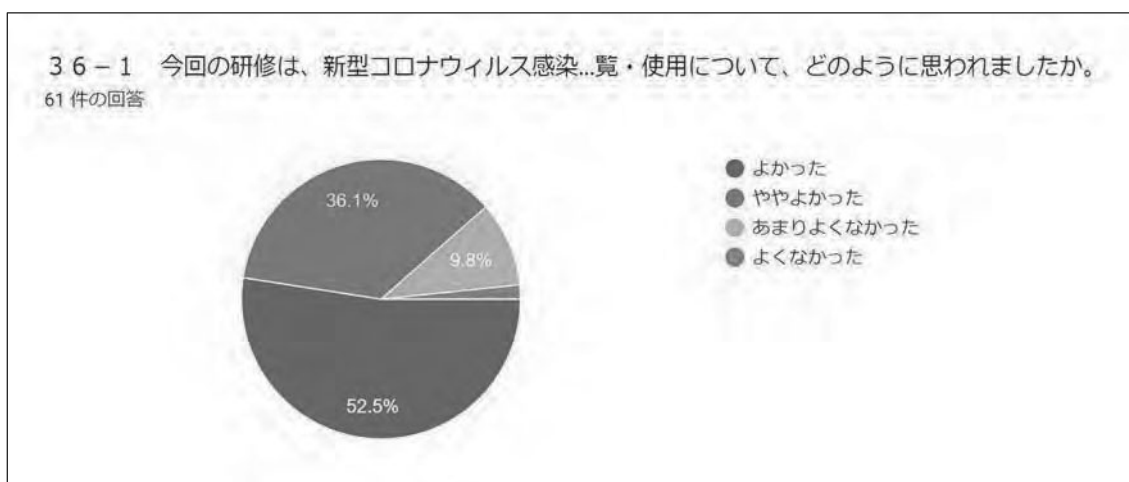
・すべての科目について「よかった」「ややよかった」の割合が80%を超えた。

【教材】

・すべての教材について「よかった」「ややよかった」の割合が95%を超えた。

【新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、リモート研修方法としたため、資料をPDF送付した
がその閲覧・使用について】

・「よかった」「ややよかった」の割合が88.6%だった。



2020 年度地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク実践力養成研修(試行研修) 研修前アンケート

このたびは、2020 年度地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク実践力養成研修(試行研修)にお申し込みをいただきありがとうございました。

受講者の皆様には、当研修お申し込み時にご了解いただいておりますが、研修効果を評価するために、研修受講前後において記名式によるアンケートへのご協力をお願いします。

今回のアンケートは受講前のアンケートとなります。質問は 23 項目です。11 月 15 日までに送信いただけますようお願いいたします。

回答後、記入いただきましたメールアドレスに回答された内容のメールと受付確認メールの 2 通のメールが届きますので、ご承知おきください。

*必須

メールアドレス*

受講者番号*

名前*

フルネームで入力してください。

1 社会福祉士としての実務経験年数を1つ選んでください。*

5 年未満

5 年以上 10 年未満

10 年以上 15 年未満

15 年以上

2 勤務先種別を1つ選んでください。*

高齢者福祉関係

障害者福祉関係

児童・母子福祉関係

医療関係

行政関係

社会福祉協議会

生活困窮者支援関係

教育関係

独立型社会福祉士事務所

その他

3 あなたの実践に近いものを1つ選んでください。*

- レジデンシャル・ソーシャルワーク
- コミュニティ・ソーシャルワーク
- どちらでもない

4 あてはまるものをすべて選んでください。*

- 認定社会福祉士
- 認定社会福祉士認証・認定機構登録スーパーバイザー
- 実習指導者
- あてはまるものはない

質問5は研修に参加した目的になります。上位3つを、1番高い理由から順に5-1 5-2 5-3 で選択してください。*

5-1 研修に参加した目的 ※1番の理由を1つ選んでください。*

- 自らの実践を振り返る
- SWの原理・理念の確認をする
- 今日の福祉施策の動向を理解する
- 今後の実践に活かす
- 今後のスーパービジョンに活かす
- 今後の実習指導に活かす

5-2 研修に参加した目的 ※2番の理由を1つ選んでください。*

- 自らの実践を振り返る
- SWの原理・理念の確認をする
- 今日の福祉施策の動向を理解する
- 今後の実践に活かす
- 今後のスーパービジョンに活かす
- 今後の実習指導に活かす

5-3 研修に参加した目的 ※3番の理由を1つ選んでください。*

- 自らの実践を振り返る
- SWの原理・理念の確認をする
- 今日の福祉施策の動向を理解する
- 今後の実践に活かす
- 今後のスーパービジョンに活かす
- 今後の実習指導に活かす

質問6から9までは当研修の到達目標になります。ご自身の状況について該当するものを選択してください。

6 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができますか。*

- そう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

7 地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できますか。*

- そう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

8 生活問題を抱えている(意識していない人も含む)人々に寄り添い、個人の支援だけではなく、地域にも視点を向けた地域づくりの支援が必要であることを理解できますか。*

- そう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

9 利用者からの複合化、複雑化した相談を断ることなく、適切に対応するために、必要に応じて他機関と連携することを理解することができますか。*

- そう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

質問10から23まではソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術を有している程度とソーシャルワーク機能の「実践・発揮機会」、「実践・発揮経験」の有無に関する質問になります。ご自身の実践や発揮状況に該当するものを選択してください。

10-1 側面的援助機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

10-2 側面的援助機能を実践・発揮する機会がありますか。*

ある

ない

10-3 側面的援助機能を実践・発揮した経験がありますか。

10-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

ある

ない

11-1 代弁機能の知識や技術を保有していますか。*

有している

ある程度有している

あまり有していない

有していない

11-2 代弁機能を実践・発揮する機会がありますか。*

ある

ない

11-3 代弁機能を実践・発揮した経験がありますか。

11-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

ある

ない

12-1 直接支援機能の知識や技術を保有していますか。*

有している

ある程度有している

あまり有していない

有していない

12-2 直接支援機能を実践・発揮する機会がありますか。*

ある

ない

12-3 直接支援機能を実践・発揮した経験がありますか。

12-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

ある

ない

13-1 教育・指導機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

13-2 教育・指導機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

13-3 教育・指導機能を実践・発揮した経験がありますか。

13-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

14-1 保護機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

14-2 保護機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

14-3 保護機能を実践・発揮した経験がありますか。

14-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

15-1 仲介機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

15-2 仲介機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

15-3 仲介機能を実践・発揮した経験がありますか。
15-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

16-1 調停機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

16-2 調停機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

16-3 調停機能を実践・発揮した経験がありますか。

16-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

17-1 ケア(ケース)マネジメント機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

17-2 ケア(ケース)マネジメント機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

17-3 ケア(ケース)マネジメント機能を実践・発揮した経験がありますか。

17-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

18-1 管理・運営助機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

18-2 管理・運営機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

18-3 管理・運営機能を実践・発揮した経験がありますか。

18-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

19-1 スーパービジョン機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

19-2 スーパービジョン機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

19-3 スーパービジョン機能を実践・発揮した経験がありますか。

19-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

20-1 ネットワーキング(連携)機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

20-2 ネットワーキング(連携)機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

20-3 ネットワーキング(連携)機能を実践・発揮した経験がありますか。

20-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

21-1 代弁・社会変革機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

21-2 代弁・社会変革機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

21-3 代弁・社会変革機能を実践・発揮した経験がありますか。

21-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

22-1 組織化機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

22-2 組織化機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

22-3 組織化機能を実践・発揮した経験がありますか。

22-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

23-1 調査・計画機能の知識や技術を保有していますか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

23-2 調査・計画機能を実践・発揮する機会がありますか。*

- ある
- ない

23-3 調査・計画機能を実践・発揮した経験がありますか。

23-2で「ある」と回答された方のみ回答してください。

- ある
- ない

2020 年度地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク実践力養成研修(試行研修) 研修後アンケート

このたびは、2020 年度地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク実践力養成研修(試行研修)にご参加いただきありがとうございました。

受講者の皆様には、当研修お申し込み時にご了解いただいておりますが、研修効果を評価するために、研修受講前後において記名式によるアンケートへのご協力をお願いします。

今回のアンケートは受講後のアンケートとなります。質問は 39 項目です。11 月 30 日までに送信いただけますようお願いいたします。

回答後、記入いただきましたメールアドレスに回答された内容のメールと受付確認メールの 2 通のメールが届きますので、ご承知おきください。

メールアドレス*

受講番号*

名前*

質問1から4までは当研修の到達目標になります。ご自身の状況について該当するものを選択してください。

- 1 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができるようになりましたか。*
 - そう思う
 - ややそう思う
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない

- 2 地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できるようになりましたか。*
 - そう思う
 - ややそう思う
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない

- 3 生活問題を抱えている(意識していない人も含む)人々に寄り添い、個人の支援だけでなく、地域にも視点を向けた地域づくりの支援が必要であることを理解できるようになりましたか。*
 - そう思う
 - ややそう思う
 - あまりそう思わない
 - まったくそう思わない

4 利用者からの複合化、複雑化した相談を断ることなく、適切に対応するために、必要に応じて他機関と連携することを理解することができるようになりましたか。*

- そう思う
- ややそう思う
- あまりそう思わない
- まったくそう思わない

質問 5 から 18 まではソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術を有している程度に関する質問になります。ご自身の実践や発揮状況に該当するものを選択してください。

5 側面的援助技能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

6 代弁機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

7 直接支援機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

8 教育・指導機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

9 保護機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

- 10 仲介機能の知識や技能を保有できましたか。*
- 有している
 - ある程度有している
 - あまり有していない
 - 有していない
- 11 調停機能の知識や技術を保有できましたか。*
- 有している
 - ある程度有している
 - あまり有していない
 - 有していない
- 12 ケア(ケース)マネジメント機能の知識や技術を保有できましたか。*
- 有している
 - ある程度有している
 - あまり有していない
 - 有していない
- 13 管理・運営機能の知識や技術を保有できましたか。*
- 有している
 - ある程度有している
 - あまり有していない
 - 有していない
- 14 スーパービジョン機能の知識や技術を保有できましたか。*
- 有している
 - ある程度有している
 - あまり有していない
 - 有していない
- 15 ネットワーキング(連携)機能の知識や技術を保有できましたか。*
- 有している
 - ある程度有している
 - あまり有していない
 - 有していない

16 代弁・社会改革機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

17 組織化機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

18 調査・計画機能の知識や技術を保有できましたか。*

- 有している
- ある程度有している
- あまり有していない
- 有していない

質問19から27までは Zoom ミーティングを用いたオンライン研修に関する質問になります。それぞれの科目の Zoom ミーティングを用いたオンライン研修という方法について回答してください。

19-1 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割(講義)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

19-2 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割(講義)

19-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

--

20-1 地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク(講義)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

20-2 地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク(講義)

20-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

21-1 地域アセスメントとネットワーク構築(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

21-2 地域アセスメントとネットワーク構築(講義・演習)

21-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

22-1 アドボカシーと意思決定支援(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

22-2 アドボカシーと意思決定支援(講義・演習)

22-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

23-1 排除をつくらない相談支援体制の構築(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

23-2 排除をつくらない相談支援体制の構築(講義・演習)

23-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

24-1 地域で支える体制の構築(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

24-2 地域で支える体制の構築(講義・演習)

24-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

25-1 社会資源の活用・開発(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

25-2 社会資源の活用・開発(講義・演習)

25-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

26-1 ソーシャルアクション(講義)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

26-2 ソーシャルアクション(講義)

26-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

27-1 アクションプラン(演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

27-2 アクションプラン(演習)

27-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

質問28から35までは教材に関する質問になります。それぞれの科目の教材について回答してください。

28-1 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割(講義)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

28-2 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割(講義)

28-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

29-1 地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク(講義)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

29-2 地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク(講義)

29-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

30-1 地域アセスメントとネットワーク構築(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

30-2 地域アセスメントとネットワーク構築(講義・演習)

30-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

31-1 アドボカシーと意思決定支援(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

31-2 アドボカシーと意思決定支援(講義・演習)

31-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

32-1 排除をつくらない相談支援体制の構築(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

32-2 排除をつくらない相談支援体制の構築(講義・演習)

32-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

33-1 地域で支える体制の構築(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

33-2 地域で支える体制の構築(講義・演習)

33-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

34-1 社会資源の活用・開発(講義・演習)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

34-2 社会資源の活用・開発(講義・演習)

34-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

35-1 ソーシャルアクション(講義)*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

35-2 ソーシャルアクション(講義)

35-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

36-1 今回の研修は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止の為、リモート研修方法とし、資料はPDFで送付いたしました。PDFでの資料の閲覧・使用について、どのように思われましたか。*

- よかった
- ややよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

36-2 36-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

37-1 新型コロナウイルス感染症による影響やそれへの対応を踏まえ、本研修内容の他に、特に学びたい内容がありましたら、ご記入をお願いします。*

37-2 37-1の理由がありましたら、ご記入をお願いします。

38 研修前後で特に変化した点について、ご記入をお願いします。*

39 研修全体の感想をご記入をお願いします。*

3)【クロス集計結果】

研修前アンケートと研修後アンケートの結果を比較し、研修の成果を抽出するため、クロス集計で分析した。分析は下記2段階で行った。なお、前後のアンケートともに回答した 61 名を分析の対象とした。分析ツールは、IBM SPSS 26 を使用した。

分析① 各知識・技術の習得

第一段階の分析として、ソーシャルワーク機能の発揮のために必要な知識・技術を有している程度に関する質問(研修前アンケート:質問 10~23/研修後アンケート:質問 5~18)について、回答者の研修前後を比較した(「有している」かどうかをより具体的に把握するため、「実践・発揮機会」の有無、「実践・発揮経験の有無」の有無を併せて問うている)。各質問の選択肢は、「有している」「ある程度有している」「あまり有していない」「有していない」の4件法である。

下記の知識・技術群の各々について、「○○の知識や技術を保有していますか」の回答を前の点数、「○○の知識や技術を保有できましたか」の回答を後の点数とし、差を研修の成果とみなした。

《知識・技術群》	
(1)側面的援助機能	(8)ケア(ケース)マネジメント機能
(2)代弁機能	(9)管理・運営機能
(3)直接支援機能	(10)スーパービジョン機能
(4)教育・指導機能	(11)ネットワーキング(連携)機能
(5)保護機能	(12)代弁・社会変革機能
(6)仲介機能	(13)組織化機能
(7)調停機能	(14)調査・計画機能

研修前→後で得点が上がった人を「改善した人」とした。図表 2-3-1 はその度数とパーセントを示したものである。

図表 2-3-1 研修前→後で改善した人の度数

			度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
側面的援助機能の知識や技術	dif_q101	1.00	16	26.230	26.230	100
代弁機能の知識や技術	dif_q111	1.00	17	27.869	27.869	100
直接支援機能の知識や技術	dif_q121	1.00	16	26.230	26.230	100
教育・指導機能の知識や技術	dif_q131	1.00	20	32.787	32.787	100
保護機能の知識や技術	dif_q141	1.00	26	42.623	42.623	100
仲介機能の知識や技術	dif_q151	1.00	15	24.590	24.590	100
調停機能の知識や技術	dif_q161	1.00	22	36.066	36.066	100
ケア(ケース)マネジメント機能の知識や技術	dif_q171	1.00	17	27.869	27.869	100
管理・運営機能の知識や技術	dif_q181	1.00	25	40.984	40.984	100
スーパービジョン機能の知識や技術	dif_q191	1.00	15	24.590	24.590	100

ネットワーキング(連携)機能の知識 や技術	dif_q201	1.00	13	21.311	21.311	100
代弁・社会変革機能の知識や技術	dif_q211	1.00	24	39.344	39.344	100
組織化機能の知識や技術	dif_q221	1.00	23	37.705	37.705	100
調査・計画機能の知識や技術	dif_q231	1.00	24	39.344	39.344	100

※サンプルサイズ 61

次に、各技術・知識について前と後の平均値を計算し、図表 2-3-2 に示した。

図表 2-3-2 各技術の得点の研修前後比較

		平均値	度数	標準偏差	平均値 の標準 誤差
側面的援助機能の知識や技術	後 5	3.131	61	0.645	0.083
	前 10-				
	1	2.918	61	0.714	0.091
代弁機能の知識や技術	後 6	3.180	61	0.592	0.076
	前 11-				
	1	3.033	61	0.752	0.096
直接支援機能の知識や技術	後 7	3.246	61	0.623	0.080
	前 12-				
	1	3.082	61	0.714	0.091
教育・指導機能の知識や技術	後 8	2.984	61	0.619	0.079
	前 13-				
	1	2.738	61	0.728	0.093
保護機能の知識や技術	後 9	3.033	61	0.706	0.090
	前 14-				
	1	2.590	61	0.824	0.106
仲介機能の知識や技術	後 10	3.098	61	0.676	0.087
	前 15-				
	1	3.033	61	0.730	0.093
調停機能の知識や技術	後 11	2.869	61	0.670	0.086
	前 16-				
	1	2.590	61	0.844	0.108
ケア(ケース)マネジメント機能の知識や 技術	後 12	3.361	61	0.659	0.084
	前 17-				
	1	3.180	61	0.671	0.086
管理・運営機能の知識や技術	後 13	2.885	61	0.777	0.099

	前 18-							
	1	2.607	61	0.822	0.105			
スーパービジョン機能の知識や技術	後 14	2.820	61	0.806	0.103			
	前 19-							
	1	2.721	61	0.859	0.110			
ネットワーキング(連携)機能の知識や技術	後 15	3.180	61	0.619	0.079			
	前 20-							
	1	3.033	61	0.657	0.084			
代弁・社会変革機能の知識や技術	後 16	2.934	61	0.704	0.090			
	前 21-							
	1	2.557	61	0.807	0.103			
組織化機能の知識や技術	後 17	2.770	61	0.739	0.095			
	前 22-							
	1	2.459	61	0.808	0.103			
調査・計画機能の知識や技術	後 18	2.721	61	0.710	0.091			
	前 23-							
	1	2.410	61	0.824	0.106			

最後に、前後の差が研修によって得られた差であるかを検定した(図表 2-3-3)。代弁機能、仲介機能、保護機能は独立していたが、それ以外の知識技術は研修によって改善されたとみなした。

図表 2-3-3 研修前後の独立の検定

	対応サンプルの差					t 値	自由度	有意確率 (両側)
	平均値	標準偏差	平均値の標準差	差の 95% 信頼区間				
				下限	上限			
側面的援助(2q5 - 1q10)	0.213	0.635	0.081	0.050	0.376	2.619	60	0.011 *
代弁機能(2q6 - 1q11)	0.148	0.628	0.080	-0.013	0.308	1.835	60	0.072
直接支援(2q7 - 1q12)	0.164	0.637	0.082	0.001	0.327	2.009	60	0.049 *
教育・指導(2q8 - 1q13)	0.246	0.789	0.101	0.044	0.448	2.435	60	0.018 *
保護機能(2q9 - 1q14)	0.443	0.742	0.095	0.253	0.633	4.658	60	0.000 ***
仲介機能(2q10 - 1q15)	0.066	0.750	0.096	-0.126	0.258	0.683	60	0.497
調停機能(2q11 - 1q16)	0.279	0.756	0.097	0.085	0.472	2.880	60	0.006 **
ケア(ケア) (2q12 - 1q17)	0.180	0.646	0.083	0.015	0.346	2.181	60	0.033 *
管理・運営(2q13 - 1q18)	0.279	0.733	0.094	0.091	0.466	2.968	60	0.004 **
スーパー(2q14 - 1q19)	0.098	0.625	0.080	-0.062	0.258	1.230	60	0.224
ネットワーキング(2q15 - 1q20)	0.148	0.573	0.073	0.001	0.294	2.012	60	0.049 *
代弁・社会変革(2q16 - 1q21)	0.377	0.637	0.082	0.214	0.540	4.625	60	0.000 ***
組織化機能(2q17 - 1q22)	0.311	0.696	0.089	0.133	0.490	3.494	60	0.001 ***
調査・計画(2q18 - 1q23)	0.311	0.807	0.103	0.105	0.518	3.014	60	0.004 **
$p > 0.05$ *	$p > 0.01$ **	$p > 0.001$ ***						

なお、研修前後で改善した人の割合が高かった項目に絞ってさらに分析を進めるため、表 1 で度数が 20 以上、パーセントが 35 以上の両方を満たした知識・技術を分析②の対象とした。両方に該当するのは、知識・技術群中の(5)・(7)・(9)・(12)・(13)・(14)の 6 項目である。

分析② 受講者の属性と研修成果のクロス

分析の第 2 として、受講者の属性を独立変数に、研修成果を従属変数にしてクロス集計を行った。【属性】は、(1)実務年数(「5 年未満」「5-10 年未満」「10-15 年未満」「15 年以上」)、(2)勤務先種別、(3)実践形態(「コミュニティ・ソーシャルワーク(CSW)」「レジデンシャル・ソーシャルワーク(RSW)」「どちらでもない」)の 3 種類である。

【研修成果】は、質問紙の構成ごとに、①研修の到達目標、②ソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術、③Zoom ミーティングを用いたオンライン研修、の3つについて分析した。②では、全 14 の知識・技術のうち、分析①で抽出した6項目のみの分析を行った。なお、③では各テーマ(講義・演習)の「オンライン研修」としての評価を問う設問ではあったが、オンライン授業としての形式面での回答、授業内容そのものについての回答が混在する結果となった。ここではそれらをまとめて集計・分析したことを述べておく。

以下では、クロス集計のうち、特徴的な傾向についてのみ概説する(クロス表も特徴的なもののみ表示する)。

なお、独立変数と従属変数の各項目は図表 2-3-4のとおり。

図表 2-3-4 クロス集計の項目

属性		研修成果	
(1)実務年数	<ul style="list-style-type: none"> ・5 年未満 ・5-10 年未満 ・10-15 年未満 ・15 年以上 	①研修の到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができたか ・ 地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できたか ・ 生活問題を抱えている(意識していない人も含む)人々に寄り添い、個人の支援だけでなく、地域にも視点を向けた地域づくりの支援が必要であることを理解できたか ・ 利用者からの複合化、複雑化した相談を断ることなく、適切に対応するために、必要に応じて他機関と連携することを理解できたか
(2)勤務先種別	<ul style="list-style-type: none"> ・行政 ・社協 ・高齢関係 ・障害関係 ・児童・母子関係 ・医療関係 ・独立型 ・教育 ・その他 	②ソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術	分析①参照

(3)実践形態	<ul style="list-style-type: none"> ・CSW ・RSW ・どちらでもない 	<p>③Zoom ミーティ ングを用 いたオン ライ ン研修</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割(講) ・ 地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク(講) ・ 地域アセスメントとネットワーク構築(講・演) ・ アドボカシーと意思決定支援(講・演) ・ 排除をつくらない相談支援体制の構築(講・演) ・ 地域で支える体制の構築(講・演) ・ 社会資源の活用・開発(講・演) ・ ソーシャルアクション(講) ・ アクションプラン(演)
---------	--	--	---

* (講)…講義、(講・演)…講義・演習、(演)…演習

①属性×研修の到達目標のクロス

①- i 分析方法および全体の傾向

4つの到達目標ごとに、研修を受講したことによる習熟・到達度を見るため、研修前後での回答(自己評価)の上昇・下降を測定する方法を取った。各質問が、研修前後とも「…について理解できるようになりましたか」といったものとなっており、それに対する回答の選択肢が、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法となっている。このため、たとえば、研修前アンケートで「ややそう思う」と回答していた人が、研修後アンケートでは「そう思う」と回答していれば〈上昇1〉とし、「あまりそう思わない」だった人が「そう思う」になれば〈上昇2〉となる。反対に、「そう思う」と回答していた人が「あまりそう思わない」になるような場合には〈下降1〉とした。

全体として、もっとも上昇した回答者が多かったのは、「地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できたか」であり、〈上昇2〉が1人、〈上昇1〉が16人だった。次に多かったのは、「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができたか」であり、〈上昇2〉が1人、〈上昇1〉が15人である。以下、属性別に見ていこう。

なお、いくつかの知識・技術で「下降」の回答傾向が相対的に目立つ結果となった。とくに多かったのは「管理・運営機能」「調査・計画機能」(どちらも〈下降1〉9人、〈下降2〉1人)、「調停機能」(〈下降1〉7人、〈下降2〉1人)である。この傾向は、研修を受けることで理解が深まり、「自分ではわかっていると思っていたが、さらに理解すべきことがあることが認識できた」ということだと、本委員会では分析している。

①- ii 実務年数とのクロス

まずは、「実務年数」と到達目標(到達度)のクロスである。実務年数は、回答者61名中、過半数が10年以上に集中しており(「5-10年未満」14人、「15年以上」34人)、10年未満は少数(「5年未満」8人、「5-10年未満」5人)となっている。

各年代を通じて上昇が多かったのは「地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できたか」である(図表2-3-5)。「5年未満」、「5-10年未満」とも〈上昇1〉が3人ずついた。「10-15年未満」は〈上昇1〉が2人、「15年以上」では〈上昇2〉が1人、〈上昇1〉が8人いた。なお、2番目に多かった「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分

の実践につなげて考えることができたか」についても近い結果が示されており、「5 年未満」は〈上昇2〉が1人、〈上昇1〉が2人、「5-10年未満」は〈上昇1〉が2人、「10-15年未満」は〈上昇1〉が3人、「15年以上」では〈上昇1〉が8人であった。

図表2-3-5 実務年数 と 地域住民と社会資源の関係を形成… のクロス表

度数

		上昇2	上昇1	変化なし	下降1	無効	合計
実務年数	5年未満	0	3	4	0	1	8
	5-10年未満	0	3	2	0	0	5
	10-15年未満	0	2	9	3	0	14
	15年以上	1	8	22	3	0	34
合計		1	16	37	6	1	61

ところで、図表 2-3-5 のように研修後に「下降」を示す回答も少なくなかったが、上述のように、研修による自己認識の向上(「さらに理解すべきことがあることが認識できた」)だととらえられるだろう。10年以上の実務年数をもつ人が、各項目で〈下降1〉を一定程度選択する傾向が見られている。

①-iii 勤務先種別とのクロス

次に、「勤務先種別」と到達目標(到達度)のクロスである。受講者が自身の所属を9種類の職種(「その他」を含む)から選択するのだが、10人前後いる種別と1~2人程度の種別の2つのグループに大別される。後者はサンプル数が小さ過ぎ、傾向をつかむことが難しいため、前者を中心に分析していくことにする。前者は「社協」(10人)、「高齢関係」(11人)、「障害関係」(7人)、「医療関係」(9人)、「独立型」(11人)である(「その他」の8人は除く)。

「上昇/下降」で特筆すべき結果を示すものは、「地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できたか」のみと言える(図表 2-3-6)。先述したように、〈上昇2〉〈上昇1〉がもっとも多かったのがこの項目であったが、中でも「独立型」は〈上昇1〉が5人いた。

図表2-3-6 勤務先種別 と 地域住民と社会資源の関係を形成… のクロス表

度数

		上昇2	上昇1	変化なし	下降1	無効	合計
勤務先種別	行政関係	0	0	0	2	0	2
	社協	0	1	8	1	0	10
	高齢関係	1	3	6	1	0	11
	障害関係	0	2	5	0	0	7
	児童・母子関係	0	1	0	1	0	2
	医療関係	0	2	7	0	0	9

独立型	0	5	6	0	0	11
教育	0	0	0	0	1	1
その他	0	2	5	1	0	8
合計	1	16	37	6	1	61

①-iv 実践形態とのクロス

最後に、「実践形態」と到達目標(到達度)のクロスである。「コミュニティ・ソーシャルワーク(CSW)」を選択した人が43人、「レジデンシャル・ソーシャルワーク(RSW)」が8人、「どちらでもない」が10人と、CSWに受講者が集中する結果となった。前二者について分析を行う。

CSWでもっとも上昇が多かったのが、「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができたか」(〈上昇1〉)が12人、および「地域住民と社会資源の関係を形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できたか」(〈上昇2〉)が1人、〈上昇1〉が10人)であり、他の項目を大幅に上回った。

RSWでも同様で、前者では〈上昇2〉が1人、〈上昇1〉が1人、後者では〈上昇1〉が3人であった。前者を示しておく(図表2-3-7)。

図表2-3-8 実践形態 と 地域共生の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し… のクロス表
度数

		上昇2	上昇1	変化なし	下降1	下降2	無効	合計
実践形態	CSW	0	12	26	5	0	0	43
	RSW	1	1	3	2	1	0	8
	どちらでもない	0	2	7	0	0	1	10
合計		1	15	36	7	1	1	61

②属性×ソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術のクロス

②- i 分析方法および全体の傾向

前述したとおり、分析①において研修前後の改善度合いで上位6つの知識・技術にしぼってクロス集計した。「保護機能」「調停機能」「管理・運営機能」「代弁・社会変革機能」「組織化機能」「調査・計画機能」の6つである。

研修前後での変化を上昇・下降の程度で見る方法は前項目と同じである。

もっとも多くの上昇が見られたのは、図表2-3-9の示すとおり、「保護機能」であった(〈上昇2〉5人、〈上昇1〉21人)。以下、属性別の傾向を見ていく。

図表 2-3-9 各機能の研修前後の変化(受講者合計)

n=61

	〈上昇 2〉	〈上昇 1〉	〈変化なし〉	〈下降 1〉	〈下降 2〉	〈無効〉
保護機能	5	21	30	4	0	1
調停機能	5	17	31	7	0	1
管理・運営機能	2	22	27	9	0	1
代弁・社会変革機能	3	20	34	3	0	1
組織化機能	2	20	33	5	0	1
調査・計画機能	4	19	28	9	0	1

*分析①で改善の度合いが上位となった 6 つを抽出した。

②-ii 実務年数とのクロス

まず、「実務年数」とソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術のクロス集計である。

「5 年未満」の 8 人の受講者のうち、もっとも上昇が見られたのは、「調停機能」(〈上昇 2〉1 人、〈上昇 1〉3 人)、「管理・運営機能」と「代弁・社会変革機能」(どちらも〈上昇 1〉4 人)であった。

「5-10 年未満」の 5 人のうち、もっとも上昇が多かったのは「管理・運営機能」と「組織化機能」(どちらも〈上昇 1〉2 人)である。

「10-15 年未満」の 14 人では、「保護機能」「代弁・社会変革機能」「調査・計画機能」(いずれも〈上昇 2〉1 人、〈上昇 1〉7 人)、「調停機能」(〈上昇 2〉2 人、〈上昇 1〉6 人)、つづいて「管理・運営機能」(〈上昇 2〉1 人、〈上昇 1〉6 人)であった。

「15 年以上」の 34 人では、最多が「保護機能」(〈上昇 2〉4 人、〈上昇 1〉10 人)、次いで「調査・計画機能」(〈上昇 2〉2 人、〈上昇 1〉11 人)、つづいて「管理・運営機能」と「組織化機能」(どちらも〈上昇 2〉1 人、〈上昇 1〉10 人の順であった。

図表 2-3-10 では、例として「保護機能」とのクロス集計を示しておく。

図表2-3-10 実務年数 と 保護機能の知識や技術 のクロス表

度数

		上昇2	上昇1	変化なし	下降1	無効	合計
実務年数	5年未満	0	3	4	0	1	8
	5-10年未満	0	1	3	1	0	5
	10-15年未満	1	7	6	0	0	14
	15年以上	4	10	17	3	0	34
合計		5	21	30	4	1	61

②-iii 勤務先種別とのクロス

次に、「勤務先種別」とソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術のクロス集計である。この分析で上昇した人が多かった項目を見れば、それぞれの職種で何を強化する必要があるかを窺うことができる。たとえば、「医療関係」の9人中4人が「調停機能」「組織化機能」が上昇しており、「独立型」では、11人中計5人が「調査・計画機能」が上昇している。実践を行う上で、これらの機能が重要になっているが、研修前はまだ十分な知識・技術を備えていないと答えていた人が、研修を受けてその自己認識を向上させたということと理解できる。

以下では、上と同様、10人前後の受講者がいた種別にしぼり、比較的顕著に上昇が見られた種別のみ説明する。

「社協」でもっとも上昇した人が多かったのは、「保護機能」「代弁・社会変革機能」(どちらも<上昇1>6人)であった。

「高齢関係」では、「調停機能」(<上昇2>2人、<上昇1>3人)、「代弁・社会変革機能」(<上昇2>1人、<上昇1>4人)が多かった。

「障害関係」では、「組織化機能」「調査・計画機能」(どちらも<上昇2>1人、<上昇1>2人)が最多であった。

「医療関係」では、「調停機能」「組織化機能」(どちらも<上昇1>4人)が最多であった。

「独立型」では、「調査・計画機能」(<上昇2>1人、<上昇1>4人)、「保護機能」(<上昇2>2人、<上昇1>2人)、「管理・運営機能」(<上昇1>4人)が多かった。

図表2-3-11では、例として「代弁・社会変革機能」とのクロス集計を示しておく。

図表2-3-11 勤務先種別 と 代弁・社会変革機能の知識や技術 のクロス表

度数

		上昇2	上昇1	変化なし	下降1	無効	合計
勤務先種別	行政関係	0	0	2	0	0	2
	社協	0	6	4	0	0	10
	高齢関係	1	4	5	1	0	11
	障害関係	1	0	6	0	0	7
	児童・母子関係	0	2	0	0	0	2
	医療関係	0	2	5	2	0	9
	独立型	0	3	8	0	0	11
	教育	0	0	0	0	1	1
	その他	1	3	4	0	0	8
合計		3	20	34	3	1	61

②-iv 実践形態とのクロス

最後に、「実践形態」とソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術のクロス集計である。「コ

コミュニティ・ソーシャルワーク(CSW)」43 人、「レジデンシャル・ソーシャルワーク(RSW)」8 人、「どちらでもない」10 人という分布である。前二者について分析を行う。

「CSW」でとくに改善が見られたものとして、「管理・運営機能」(〈上昇2〉2 人、〈上昇1〉17 人)、「保護機能」(〈上昇2〉3 人、〈上昇1〉15 人)、「代弁・社会変革機能」(〈上昇2〉3 人、〈上昇1〉14 人)、「調査・計画機能」(〈上昇2〉3 人、〈上昇1〉13 人)を挙げることができる。

「RSW」では、「調査・計画機能」(〈上昇1〉5 人)、「調停機能」(〈上昇2〉1 人、〈上昇1〉3 人)、「組織化機能」(〈上昇1〉4 人)で改善が多く見られた。

なお、「CSW」では、いくつかの知識・技術で下降が多く見られた。「管理・運営機能」(〈下降1〉7 人)、「調停機能」「調査・計画機能」(どちらも〈下降1〉6 人)。このうち、たとえば「管理・運営機能」では、「下降」も多いが「上昇」も最多を示している。繰り返しとなるが、多くの受講者の中で気づきや知識獲得につながったと理解したい(図表 2-3-12)。

図表2-3-12 実践形態 と 管理・運営機能知識や技術 のクロス表

度数

		上昇2	上昇1	変化なし	下降1	無効	合計
実践形態	CSW	2	17	17	7	0	43
	RSW	0	2	4	2	0	8
	どちらでもない	0	3	6	0	1	10
合計		2	22	27	9	1	61

③属性×Zoom ミーティングを用いたオンライン研修のクロス

③- i 分析方法および全体の傾向

研修の9つのテーマ(講義・演習)ごとのクロス集計を行った。これまでの分析と異なり、研修前後の比較(改善の度合い)でなく、研修後アンケートで各テーマの感想を尋ねるものである。受講者が、「よかった」「ややよかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」の中から一つ選択する4件法である。

全体で「よかった」がもっとも多かったのは、「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」(46 人)で、次いで「アドボカシーと意思決定支援」(45 人)が多かった。

「よかった」「ややよかった」の合計では、「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」「地域アセスメントとネットワーク」「アドボカシーと意思決定支援」「ソーシャルアクション」(58 人)が最多となった。

③- ii 実務年数とのクロス

まずは「実務年数」と各テーマとのクロス集計である。

「5 年未満」では、「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」(「よかった」7 人)のほか、「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」「地域アセスメントとネットワーク構築」「アドボカシーと意思決定支援」「排除をつくらない相談支援体制の構築」(いずれも「よかった」5 人、「ややよかった」2 人)

の評価が高かった。

「5-10 年未満」では、「アドボカシーと意思決定支援」(「よかった」4 人、「ややよかった」1 人)がもっとも高かった。

「10-15 年未満」では、「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」(「よかった」13 人、「ややよかった」1 人)、「アドボカシーと意思決定支援」「排除をつくらない相談支援体制の構築」「ソーシャルアクション」(いずれも「よかった」12 人、「ややよかった」2 人)がとくに高評価となった。

「15 年以上」でとりわけ高評価を得たのは、「ソーシャルアクション」(「よかった」22 人、「ややよかった」12 人)、「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」「アドボカシーと意思決定支援」(いずれも「よかった」24 人、「ややよかった」8 人)、「排除をつくらない相談支援体制の構築」(「よかった」22 人、「ややよかった」10 人)である。

図表 2-3-13 の要領でクロス集計した。

図表2-3-13 実務年数と「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」のクロス表
度数

		よかった	ややよかった	あまりよくなかった	無回答	合計
実務年数	5年未満	7	0	0	1	8
	5-10年未満	2	3	0	0	5
	10-15年未満	13	1	0	0	14
	15年以上	24	8	2	0	34
合計		46	12	2	1	61

③-iii 勤務先種別とのクロス

次に、「勤務先種別」と各テーマとのクロス集計である。

「社協」では、「アドボカシーと意思決定支援」(「よかった」8 人、「ややよかった」2 人)、「ソーシャルアクション」(「よかった」7 人、「ややよかった」3 人)が、とくに高評価であった。

「高齢関係」では、「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」(どちらも「よかった」10 人、「ややよかった」1 人)がもっとも高評価であった。

「障害関係」では、「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」(「よかった」6 人、「ややよかった」1 人)がもっとも高い評価を得た。

「医療関係」では、「地域アセスメントとネットワーク構築」「アドボカシーと意思決定支援」(どちらも「よかった」8 人、「ややよかった」1 人)が最多となった。

「独立型」では、「アドボカシーと意思決定支援」「排除をつくらない相談支援」(「よかった」10 人)を筆頭に、「排除をつくらない相談支援」(「よかった」9 人、「ややよかった」2 人)、「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」「ソーシャルアクション」(「よかった」8 人、「ややよかった」3 人)がとりわけ高評価となった。

図表 2-3-14 に例示しておく。

図表2-3-14 勤務先種別と「アドボカシーと意思決定支援」のクロス表

度数

		よかった	ややよかった	あまりよくなかつた	無回答	合計
勤務先種別	行政関係	0	2	0	0	2
	社協	8	2	0	0	10
	高齢関係	8	2	1	0	11
	障害関係	4	3	0	0	7
	児童・母子関係	2	0	0	0	2
	医療関係	8	1	0	0	9
	独立型	10	0	1	0	11
	教育	0	0	0	1	1
	その他	5	3	0	0	8
合計	45	13	2	1	61	

③-iv 実践形態とのクロス

最後に、「実践形態」と各テーマとのクロス集計である。

「コミュニティ・ソーシャルワーク(CSW)」でとりわけ高評価だったのは、「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」「アドボカシーと意思決定支援」(どちらも「よかった」32人、「ややよかった」9人)、「地域アセスメントとネットワーク構築」(「よかった」30人、「ややよかった」11人)である。

「レジデンシャル・ソーシャルワーク(RSW)」で最多は「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」(「よかった」7人、「ややよかった」1人)となった。

図表 2-3-15 を例として示しておく。

図表2-3-15 実践形態と「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」のクロス表

度数

		よかった	ややよかった	あまりよくなかつた	無回答	合計
実践形態	CSW	32	9	2	0	43
	RSW	7	1	0	0	8
	どちらでもない	7	2	0	1	10
合計	46	12	2	1	61	

4)「研修全体の感想」による評価

本調査では、自由記述回答に対してテキストマイニング(計量テキスト分析, テキストアナリティクス)の手法を用いて分析を行った。使用したソフトは、Text Mining Studio 6.4.0(NTT データ数理システム)である。

まず分析対象となったテキストの基本情報、品詞出現回数を確認し、分析対象となるデータの概要を把握した(図表 2-3-16, 図表 2-3-17)。つぎに頻度分析(名詞上位 20)を行った(図表 2-3-18)。そのうえで、クラスタ分析、係り受けネットワーク、評価分析を行った(図表 2-3-19, 図表 2-3-20, 図表 2-3-21)。

評価分析の結果について、原文を参照することで具体的にみていきたい。

肯定的に評価された単語である「研修」の原文を参照すると、「会場での研修よりも、講師・グループメンバーとの心理的距離感を近くに感じることができ、普段は受け身的に受講する感じなのですが、主体的に受講することができました。」「この研修を展開するにあたり、これまでの地域福祉動向や今までの受講生の学びのふりかえりを事前に行う必要を感じました。単に、時代の流れとして、地域共生社会を理解しても、本質のこれまでの歴史、自身へのスキル確認をしないとなかなか実践にはつながらないと思いました。」「盛りだくさんの研修でしたが、充実した時間でした。学ばなければいけないことは、まだまだたくさんあると思います。また、学ぶだけではなく、それを実践に活かし、社会に貢献していくことが社会福祉士としての役割と考えます。」「講義の中でもありましたが、まさにソーシャルワークの転換期と感じます。(中略)こうした研修を社会福祉士全体が受けることができるよう、そして研修の質も一定を保証されて開催できるよう、お願いします。オンライン研修はメリットもデメリットもあるかもしれませんが、全国の皆さんが気軽に軽費で同じように受けられるということでは、とても価値のあることと思います。」などがある。

同じく肯定的に評価された「機会」の原文を参照すると、「無理をして集まらなくとも、オンラインでいいのではと思った。学びを止めないために、オンライン研修の機会を大切にしていきたい。」「集合研修とZoom、それぞれの良さがあると思いますが、コロナ禍の中でも学ぶ機会がもてることに感謝します。」などがあつた。「グループワーク」の原文を参照すると、「対話を通じたグループワークって社会福祉士らしくていいなと思いました。」「グループワークについては、時間に追われ難しいと感じながらも全国のソーシャルワーカーと繋がる機会は貴重です。」などがあつた。

否定的に評価された単語は、数値的には少ない。原文を確認すると、「グループワーク」では、「互いの連絡先交換ができない不便さと通信状況に左右されてしまうグループワークの難しさも感じた。」「リモートのグループワークは、時間が短く、アイスブレイキングの時間も非常に少なく、グループワークを行うのはかなりの集中力が必要であつた。」などがある。

以上、「研修全体の感想」をテキストマイニングで分析した結果、受講者は今回の研修を肯定的に受け止めていることが分かつた。改善の余地があるとすれば、オンライン研修におけるグループワークである。対面でのグループワークとは異なり、オンラインのグループワークは、アイスブレイクを丁寧に行い、より多くの時間をかけて行う必要がある。また、オンラインでのグループワークをスムーズに行うためには、自らの通信環境だけではなく、グループメンバーの通信環境が大きく作用することがわかつた。

図表 2-3-16 基本情報

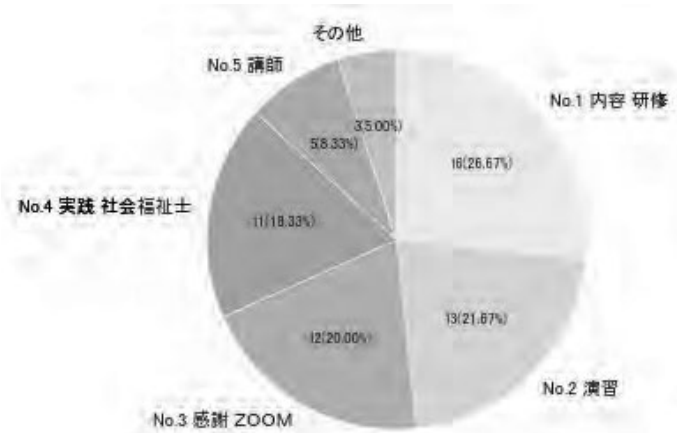
項目	値
総行数	60
平均行長(文字数)	157.8
総文章数	214
平均文章長(文字数)	44.3
延べ単語数	1813
単語種別数	943

図表 2-3-17 品詞出現回数

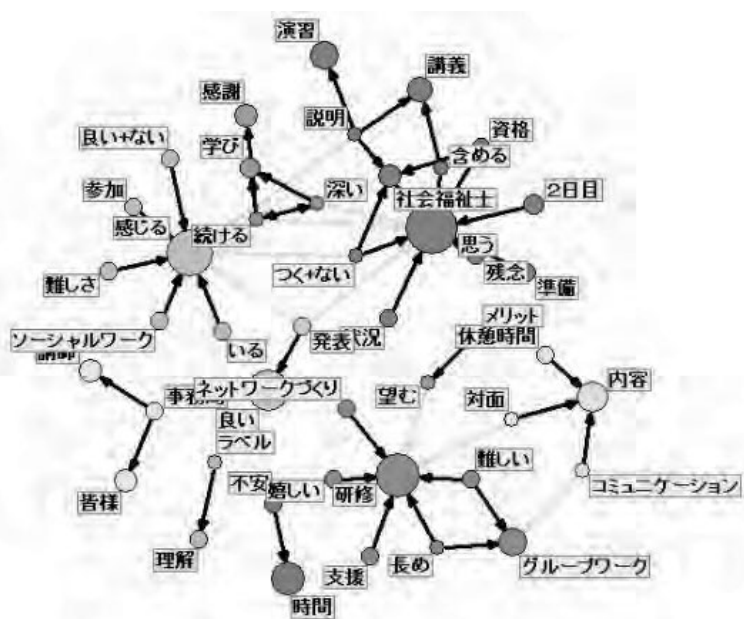
品詞	出現回数
名詞	1147
代名詞	23
動詞	309
形容詞	85
形容動詞	73
連体詞	21
副詞	99
その他	56
エラー	0

図表 2-3-18 単語品詞分析(名詞, 上位 20)

単語	頻度
内容	14
グループワーク	11
ZOOM	8
機会	8
自分	8
社会福祉士	8
皆様	7
講師	7
人	7
学び	6
オンライン	5
ソーシャルワーカー	5
集合研修	5
職場	5
全国	5
地域	5
会場	4
皆さん	4
参加者	4
事務局	4



図表 2-3-19 クラスタ分析



図表 2-3-20 係り受けネットワーク

図表 2-3-21 評価分析

単語	Positive	Negative
研修	7	-1
機会	3	0
グループワーク	3	-1
ご配慮	2	0
確認	2	0
共有	2	0
内容	2	0

5) アンケート調査まとめ

本調査は、研修前後に調査を行うことによって、受講者の回答の変化から研修の効果を把握しようとするものであった。今までになかったオンライン形式の研修であったため、実施側・受講者側双方が手探りしながらではあったが、今後の研修に向けた示唆を得ることができた。上記分析結果からは、①研修効果に関するデータ、②オンライン研修に関するデータを得ることができた。

前者、つまり研修効果に関しては、多くの項目で、受講による改善が見られた。多くの受講者の参加目的として、専門的な知識についての学び直し、新しい知識の習得、政策動向の把握などを通して、自身の実践を向上させることがあった。その意味では、研修の到達目標に対して、一定程度以上の効果はあったものと判断できる。なお、相対的に改善の低かったものは、今後の実施内容・方法の見直しによって、さらに実効性のあるものになるよう検討することが課題となる。

後者は、主にオンライン研修についての形式面での情報把握を行うことができた。集合型に比してメリットとデメリットがあるが、参加者同士の学び合いの効果は思いのほか損なわれないことがわかった。受講者からは、主体的な関わりができたなどの肯定的な意見が見られ、物理的・時間的な負担をむしろ減じる利点を窺うことができた。半面において、グループワークなどでは課題も残った。

なお、分析方法としては、単純集計、クロス集計、自由記述のテキストマイニングを行った。悉皆調査ゆえに避けられないこととは言え、受講者の属性に偏り(実務経験年数 10 年以上の受講者、コミュニティソーシャルワーク系の受講者の割合が高い)があった。今後、継続的に研修を行うと母集団も大きくなるはずであるから、より偏りのないサンプルに対する調査を行い、精度の高い分析が可能になるものと期待される。

クロス集計では、属性ごとの研修成果の度合いを分析した。たとえば、属性「勤務先種別」と研修成果「ソーシャルワーク機能発揮のために必要な知識・技術」のクロスでは、「社協」に属する受講者で「保護機能」「代弁・社会変革機能」を向上させた人が多く、また「障害関係」の受講者に「組織化機能」「調査・計画機能」を向上させた人が多く見られた。各々の職務上、これらの機能が重要であるものの、今までは十分身につけていなかった知識・技術を、この研修で獲得できたものと推測できる。

テキストマイニングのクラスタ分析では、鍵となる単語が他のどの単語と関連づけられるかを可視化することができ、受講者が研修に何を求めているかの手がかりとなる。

このようにプレ・ポストの 2 回の調査を行い、多角的に分析することで、研修の効果や課題を客観的に示すことができ、今後の発展のために非常に有益なものとなった。

(4)研修後の受講者によるフォーカスグループインタビューの結果と分析

1)調査方法

①調査目的

現任の社会福祉士が地域共生社会の実現に向けて新たに求められる役割や機能を果たすことができるよう実施した試行研修の来年度からの全国展開に向けて、研修の質を高めるため、受講いただいた方々から研修に対するご意見やご要望等をいただく。

②調査対象

多様な視点から評価いただくために、試行研修の受講者の中から、以下の要因をもとに、12人(1回6人のフォーカスグループインタビューを2回)を調査対象者とした(図表 2-4-1)。

- ・実務経験年数
- ・会員の有無
- ・認定社会福祉士の有無
- ・勤務先種別
- ・レジデンシャル・ソーシャルワークとコミュニティ・ソーシャルワークの分類

図表 2-4-1(1) フォーカスグループインタビュー 調査対象者(1回目)

氏名	実務経験	会員区分	認定社会福祉士	勤務先種別	実践現場
A	5年以上10年未満	会員		社会福祉協議会	CSW
B	10年以上	会員	○	行政関係	CSW
C	10年以上	会員	○	高齢者福祉関係	CSW
D	10年以上	会員	○	生活困窮者支援関係	CSW
E	10年以上	会員		児童・母子福祉関係	RSW
F	10年以上	会員外		社会福祉協議会	CSW

図表 2-4-1(2) フォーカスグループインタビュー 調査対象者(2回目)

氏名	実務経験	会員区分	認定社会福祉士	勤務先種別	実践現場
G	10年以上	会員	○	行政関係	CSW
H	5年未満	会員		その他	どちらでもない
I	10年以上	会員	○	独立型社会福祉士事務所	CSW
J	10年以上	会員外		医療関係	どちらでもない
K	10年以上	会員外		障害者福祉関係	RSW
L	5年未満	会員		社会福祉協議会	CSW

CSW はコミュニティ・ソーシャルワーク系の実践現場

RSW はレジデンシャル・ソーシャルワーク系の実践現場

③調査方法

フォーカスグループインタビューは、1回2時間とし、12月20日と12月26日にそれぞれ、6人の調査対象

者に対して、Zoomにて実施した。インタビュー参加を依頼する際に、調査目的およびインタビュー内容を提示するとともに、インタビュー対象者の権利やプライバシー保護等を伝えた。また、このような内容は、インタビュー開始前に再度確認してから、Zoomの録画機能にて録画した。インタビュー者は、本事業委員会委員である。

インタビュー内容は、研修全体に関する意見や要望(科目の構成、不足内容、特に強調すべき点等)、各科目の目標を踏まえた内容・教授方法・教材等に関する意見や要望、オンラインによる研修に関する意見や要望、研修運営に関する意見や要望である。

④分析方法

音声データをすべて文字に起こし、それぞれのインタビュー項目にそって主な意見や要望等をまとめるとともに、テキストマイニング(計量テキスト分析)により探索的に分析を行った。

2)調査結果と分析

【調査結果】

①研修全体に関する意見や要望(科目の構成、不足内容、特に強調すべき点等)

研修全体については主に次のような意見や要望が挙げられた。

- 科目の構成を、マイクロ・メゾ・マクロからマイクロに戻る構成にしてはどうか。
- 「社会資源の活用・開発」の中の地域福祉計画に関しては別科目として、2番目の講義としてはどうか。
- 「地域アセスメントとネットワーク構築」の科目の次に、「社会資源の活用・開発」を入れた方が個別課題から地域課題につながるのではないか。
- 「排除をつくらない相談支援体制の構築」の科目の次に、「アドボカシーと意思決定支援」をもってくると、唐突感がなく、その重要性が認識できるのではないか。
- 受講者が自分の実践に引きつけられる構成にしてはどうか。
- 研修内容が盛り沢山すぎなので、継続的な研修にしてはどうか。
- 研修の位置づけをもっと明確にする必要があるのではないか。
- 社会福祉士の役割と科目の関係がわかるような全体像があるとわかりやすい。それを科目の冒頭で確認するとつながりがわかるのではないか。
- 総論である「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」で使用したスライドを、他の科目でも再掲するとつながって理解しやすいのではないか。
- 科目間で同じような資料は調整して削除してはどうか。
- レジデンシャル・ソーシャルワークを日頃行なっている社会福祉士にとっては、理解が難しいとともに、演習に入りにくい雰囲気があった。このような受講者も自分の実践に引き付けられるような工夫が必要ではないか。
- 事前課題を出して、自分の実践に引きつけることができるのではないか。
- 演習はもっと論点を絞って行なってはどうか。
- 司会を誰がやるか等で時間をとるので、決めてはどうか。
- 演習にファシリテーターがいれば目標にそった議論になるのではないか。
- オンラインでは演習ができるような関係になるのが難しいので、アイスブレイクを行い、2日間同じメンバーにしてはどうか。
- 「地域アセスメント」の事前課題として地域アセスメント等の自分の実践に関する整理をしてきて、演習を進めていくにしたがってどんどん書き込んでいけるようにしてはどうか。

②各科目の目標を踏まえた内容、教授方法、教材等に関する意見や要望

「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」(前半)

- 専門官が講義を担当することで、社会的存在としての社会福祉士を意識できる。
- 国が社会福祉士に何を求めているのかを明確にして強調してはどうか。
- 事例の説明を行なってほしい。
- 社会福祉士がアクションを起こすような動機づけになる話をしてほしい。
- 資料等の情報をまとめて提示してほしい。
- 事前に資料等を調べておいて、演習で共有してはどうか。

「地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割」(後半)

- 地域共生社会とソーシャルワーク専門職のグローバル定義が繋がった。
- 重層的支援体制整備事業の全体イメージに社会福祉士の役割をまとめることで、政策において社会福祉士としてどのように考えればいいのか理解できた。

「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」

- ミクロ・メゾ・マクロ全体の図が非常に参考になった。
- 交互作用等の学び直しの内容をもっと入れてはどうか。
- 同じ講師なので、この科目から「ソーシャルアクション」につなげた方がわかりやすいのではないかな。
- スペシフィックな実践をしている社会福祉士にとっては、自分の実践とは乖離していると思ったのではないかな。

「地域アセスメントとネットワーク構築」

- これまでのネットワーク研修等のダイジェスト版だと感じ、概要を理解できた。
- 演習のディスカッションの項目をもう少し減らしてはどうか。
- シートを活用してはどうか。
- より詳しく学びたい人への研修の紹介があってもいいのではないかな。

「アドボカシーと意思決定支援」

- この科目を入れるのは不可欠だと思った。
- 様々な意思決定支援のガイドラインを比較表にして紹介してはどうか。
- 「意思決定支援」ではなく、「権利擁護」の名称にした方が適切ではないかな。
- アドボカシーはミクロのみならず、メゾやマクロレベルでも求められるのではないかな。
- 参加支援におけるアドボカシーも重要なのではないかな。

「排除をつくらない相談支援体制の構築」

- 困難事例に関する説明等、自分になかった発想を得ることができた。
- 演習の際にキーワードを挙げてくれていたので、話し合いがしやすかった。
- 理念的な話でよかったです。時間が不足していると感じた。
- 排除をつくらない相談支援体制づくりについても説明してほしい。
- スライドで挙げられている「見えない課題を見る」「繋がらないクライアントと繋がる」等について説明し

てほしい。

「地域で支える体制の構築」

- 俯瞰的に説明してもらえて勉強になった。
- 地域福祉とあまり関係のない受講者にとっては乖離しているので、所属機関等も地域のひとつだという理解で、つながりをつくってはどうか。
- ケースワーク中心の社会福祉士にとっては、演習がしづらい。

「社会資源の活用・開発」

- 多様な事例があり理解できた。
- 社会福祉法人の連携について触れてはどうか。
- 参加支援のために、多様な主体の参加についてももう少し説明してはどうか。
- 「コロナで地域福祉の活動はどう変わるか」(受講資料 p104)についてもっと説明してほしい。
- それぞれの所属組織と地域がどのようにつながっているのかの事例等を説明すると、主にレジデンシャル・ソーシャルワークを行なっている社会福祉士もイメージをもてるのではないか。
- 生活者レベルにおいて、その人を支えていくためにどのように融合するのかといったような事例を入れてほしい。
- 演習の SWOT 分析はとても興味があるが、どの立場で分析すればよいのか等の戸惑いがあった。
- 演習では、シートを使用して自分の実践事例をまとめてきてはどうか。

「ソーシャルアクション」

- 概念的にソーシャルアクションを確実に伝えることができていた。
- 展開過程の可視化がよかった。
- 事例においてどのように具体的に働きかけるのか等について説明してほしい。
- ソーシャルワーカーの強みについても事例を加えて説明してほしい。
- パワーアセスメントについて演習を行なってほしい。
- 自分ができるのかと疑問があるので、演習で自分の立場としてどうかを考える機会がほしい。

「アクションプラン」

- 「ソーシャルアクション」の科目の次にあるので、ソーシャルアクションのプランニングをすと思ってしまったため、研修の振り返り等の名称にしてはどうか。
- 議論をするための枠組みを提示してほしい。
- ワークシートを使用してはどうか。

③オンラインによる研修に関する意見や要望

- 時間的かつ経済的に研修に参加しやすい。
- 最初にファシリテーターの役割や顔出し等について説明してはどうか。
- 事前の動作確認の機会をもうけてほしい。
- 今後はハイブリッドで行なってはどうか。
- オンライン特有の疲れがあるので、休憩時間がもっと必要ではないか。

- 名簿の共有等の、継続してつながれるような仕組みがほしい。
- 名前のところに、「医療分野」等の受講者の情報を加えてはどうか。
- ちょっと希望者が話をできるようなルームを作ってはどうか。

④研修運営に関する意見や要望

- 養成校からの情報提供など、非会員への情報提供を充実してほしい。
- 印刷するのが大変なので、紙ベースでの資料を送付してほしい。
- 別の研修でティータイム用のティーバッグとお菓子が資料とともに送られてきた。離れていても、同じものを食べながら休憩することで、休憩時間中も話が弾んだ。
- 各グループの演習を録画して見えるようにしてほしい。
- 研修を再度見られるようにしてほしい。
- オンラインで参加できない人のための機会も確保する必要があるのではないか。
- 全国展開にあたっては、講師養成研修を行なってほしい。

3)FGI 分析

本調査では、フォーカスグループインタビュー(FGI)の音声データを文字起こし、逐語録を作成した。その逐語録に対してテキストマイニング(計量テキスト分析, テキストアナリティクス)の手法を用いて分析を行った。使用したソフトは、Text Mining Studio 6.4.0(NTT データ数理システム)である。

まず分析対象となった逐語録の基本情報、品詞出現回数を確認し、分析対象となるデータの概要を把握した(図表 2-4-2, 図表 2-4-3)。つぎに頻度分析(名詞, 上位 50)を行った(図表 2-4-4)。そのうえで、クラスタ分析、共起ネットワーク分析、特徴分析を行った(図表 2-4-5, 図表 2-4-6, 図表 2-4-7)。

まず頻度分析の結果について、抽出されたいくつかの単語について、原文を参照することで具体的にみていきたい。

「地域」については、「ソーシャルワーカーが、この地域共生社会に求められる役割とか責務ってところが、どうも、この地域共生社会ってというのが、地域づくりなのか、相談支援なのかってなってしまうと、なかなかソーシャルワーカーにとっては、個別支援が大事なのかなってなってしまうんですけど。」「社会福祉士という専門職の中でどこまでできるのかってという部分と、あと国が地域をどうつくっていくのか、どう考えてるのかってところが、一番僕らが見えてなくて、それを現場の方に、何かあったときに、困ったときに継続する困難支援等々言われても、なかなか事後事後になって、方向性としては、改善の方には向かわないんじゃないかな、思っていて、いろいろ入口というか、その部分からの、何か取り組みってというのは、必要になるんじゃないかなっていうのを、ちょっと感じたところです。」などがある。

「Zoom」については、「私、丸っきり初めてこれが Zoom の研修だったので、非常に最初不安だったんですが、事務局の方のご配慮もあって、うまいこと、そのブレイクアウトなんていうのも、初めて知りましたし、いい経験できたなっていうところと、あと、ちょっと1点だけ、グループワークしてて、最後、私がまとめ役になったときに、ちょっと操作間違っ、私抜けちゃって、戻れなくなって、ご迷惑かけたなっていうところもあったんですけど。」「Zoom 研修と集合研修ですけれども、今までも集合研修は、当然当たり前でやってきていて、集合研修、(中略)途中の休憩時間とかで、いろいろ話もできるし、楽しみが多い。東京行けば行ったで、東京の友達と行き会えたりっていうような、そんなところは、当然あったりして、ただ、やっぱり Zoom は Zoom で、今日もそうなんですけれども、本当にそこまで移動しなくて済むのでね。」などがある。

「社会福祉士」については、「今回のこの講義内容につきましては、社会、地域共生の社会っていうことで、

社会福祉士の醍醐味になるんだろうなっていう思いがありますので、多くの方に、会員外問わず、広げていただきたいというように思います。」「どうしても社会福祉士という立場と、あと所属する組織ですよね。高齢なのか障害なのか児童なのかっていうところで、やはりその辺りが、その組織の限界があって、そこまで手が出せないとか。やはり分野別の法制度ですので、その制度を、法令遵守しようとする、どうしても一歩踏み込めない。これは障害者の話だから、高齢者の私は関係ありませんとか、そうなるのかなっていうところで、それぞれの専門の法制度の縦割りのところを、もっとのりしろを広げて、そのつなぎの部分はどうしていくのかなっていうのを考えていかないと、社会福祉士という全体的な中で、その自分の所属を考えると、なかなか難しいところもあるのかなと思った次第です。」などがある。

「地域」については、地域共生社会の重要性を再確認するとともに、日々のミクロな実践をどのように地域に展開していくことの戸惑いが語られた。「Zoom」については、コロナ禍において、はじめてオンライン（Zoom）の研修を経験した新鮮さ、不慣れな部分、さらなる工夫の余地、改めて対面研修の魅力などが語られた。「社会福祉士」については、社会福祉士の専門性、醍醐味としての地域的な展開を行う大切さと、特定の組織に所属する社会福祉士ができることの限界が語られた。

つぎに特徴分析の結果について、原文を参照することで具体的にみていきたい。特徴分析では、インタビュー対象者の現在の実践領域がコミュニティ（地域系）なのか、レジデンシャル（施設系）なのかで特徴的に語られる単語の抽出を行った。

実践領域がコミュニティのインタビュー対象者において特徴的に抽出された単語は、「社協」、「つながり」、「個別支援」などである。原文を参照すると、「社協」については、「アクションプランというか、地域福祉計画とか、社会福祉協議会の作る推進計画ですね。恐らく個別の方っていうのは、なかなかその辺り身近でないのかなと思うので、（中略）最後それで終わってしまうと、消化不良ののかなっていうの分かるんですけど、我々にとっては、そこが今、肝のところなので、もう少し掘り下げたいなっていうところあったし、逆に個別支援の人にも、そういったものを、もっと知ってほしいっていうか、社協がもっとアピールしないといけないんですけども、そういったところも、問題、課題というか、そういうのあるのかなと思いました。」などがある。「つながり」については、「アセスメントをした後に、資源開発を入れた方が、個別の課題があって、地域がどうなってるか。その個別の課題を普遍化して、サービスをつくっていくみたいなのところのつながりになるのかなと思うので、ちょっと社会資源が、その先になってしまってるっていうのが気になるかなというところと、あと主任ケアマネさんであれば、そういった研修も、地域課題から資源開発って取り組まれていると思うので、そこをどう捉えるかっていうのが、カリキュラム上、工夫してもらえたらいいのかなと思いました。」などがある。「個別支援」では、「やっぱり、私が今地域やってるから分かりませんが、やっぱり意思決定支援っていうのが、真ん中に突然入ってくると、ちょっと個別支援過ぎて、ちょっと自分に引き寄せて考えれなかったなというのがあるので、その順番とかというところ辺がどうだったのかなっていう。」などがある。

実践領域がレジデンシャルのインタビュー対象者において特徴的に抽出された単語は、「オンライン」、「立場」、「方法」などである。原文を参照すると、「オンライン」については、「今回、今お話聞くと、やっぱり、このオンラインについて不慣れとかっていう問題が出てくるのかなと思いました。本来であれば、いわゆる講義、講義の間の休憩時間とかに、くだらない話とかいろんなお話ができるんです。それができなかったっていうのが、ちょっと大きいのかな。それによって、そのグループワークも、1日で終わるのか、同じメンバーで2日続けるかっていうのも大きく変わってくると思うんですけども、これ例えばなんですけども、講義始まる前に、アイスブレイクの時間を長く取って、少し和気あいあいとするというところですね。それをつくってから講義に入ると、話も進むのかな。そんなことを思っていました。」などである。「立場」については、「大学でやっていたときに地域福祉をやっていたので、そういう意味では地域共生社会という言葉をいかに地域のなか

で共有していくかということ、今回この研修を通して、実際にいろんな立場で社会福祉士として関わられている方と共有できたことは、一つ研修の目的としても大きかったかなと思います。」などがある。「方法」については、「本当に意思能力だとか、行為能力の低い方とかってたくさんいらして、バルネラビリティーとか、その辺り中心に、何か支援できる方法が、今後見つければいいなと思って、受けさせていただきました。」などがある。

特徴分析の結果から見えてくることは、コミュニティなのか、あるいはレジデンシャルなのかという実践領域の違いにより今回の研修の受け止め方は異なるということといえる。実践領域がコミュニティの参加者は、研修テーマである「地域共生社会」について自分のこととして具体的に語っている。他方、実践領域がレジデンシャルの参加者は、「地域共生社会」について自らの実践に照らし合わせて具体的に言及することは無いものの、実践のあり方を模索しているということができらる。

図表 2-4-2 基本情報

項目	値
総行数	436
平均行長(文字数)	185
総文章数	1,939
平均文章長(文字数)	42
延べ単語数	14,713
単語種別数	2,566

図表 2-4-3 品詞出現回数

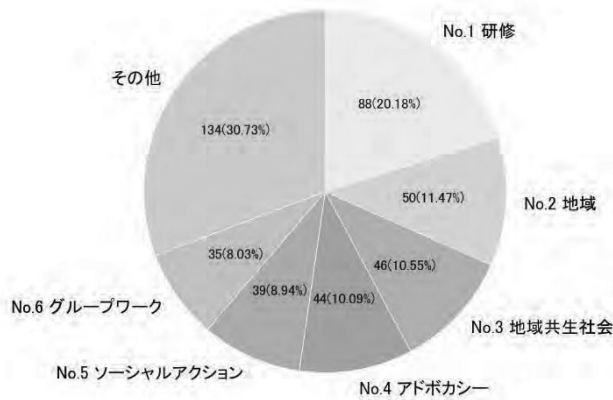
品詞	出現回数
名詞	6,835
動詞	3,266
形容詞	495
形容動詞	468
副詞	1,642
その他	1,250
分かつ書きエラー	0

図表 2-4-4 頻度分析(名詞, 上位 50)

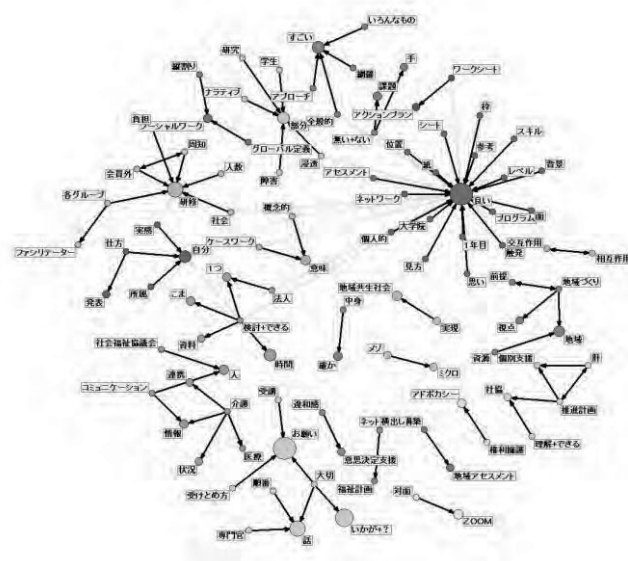
順位	単語	頻度
1	地域	33
2	Zoom	29
3	地域共生社会	27
3	内容	27
5	社会福祉士	26
6	事例	25
7	立場	20
8	アドボカシー	17
8	役割	17
10	ソーシャルアクション	16
10	ソーシャルワーク	16
25	メゾ	11
25	現場	11
25	視点	11
25	自分たち	11
25	社会資源	11
31	機会	10
31	国	10
31	事務局	10
31	地域アセスメント	10
35	ICT	9
35	SWOT分析	9

10	課題	16
10	問題	16
14	グループワーク	15
14	情報	15
16	オンライン	14
16	ソーシャルワーカー	14
16	繋がり	14
16	領域	14
20	アクションプラン	13
20	グループ	13
22	意思決定支援	12
22	学び	12
22	病院	12
25	コロナ禍	11

35	コロナ	9
35	テーマ	9
35	委員会	9
35	社協	9
41	ツール	8
41	ブレイクアウトルーム	8
41	使い方	8
41	事前課題	8
45	位置づけ	7
45	可能性	7
45	資料	7
45	実践力	7
49	アセスメント	6
49	ファシリテーター	6



図表 2-4-5 クラスタ分析



図表 2-4-6 共起ネットワーク

図表 2-4-7 特徴分析

順位	コミュニティ		レジデンシャル	
	特徴語	指標値	特徴語	指標値
1	社協	4.729	オンライン	5.075
2	つながり	3.153	立場	3.98
3	個別支援	3.153	方法	3.806
4	メゾ	2.672	自分	3.365
5	Zoom	2.364	社会福祉士	3.191
6	意思決定支援	2.364	休憩時間	3.018
7	資源開発	2.364	言葉	3.018
8	グループワーク	2.191	地域共生社会	3.018
9	地域	1.711	病院	3.018
10	カリキュラム	1.576	問題	3.018

(5) 試行研修の全体評価

ここでは、試行研修全体を通じた評価を行う。研修の目的と照らしてみれば、新カリキュラム、とりわけ、「地域共生社会の実現」や「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等」に対応できる社会福祉士の養成に、本研修が如何に貢献できたのかが問われることになる。以下では、上記 3 つの評価(講師及びスタッフによる評価・研修受講前後のアンケート評価・フォーカスグループインタビューによる評価)の結果をもとにこの点を振り返っておく。

1) 講師及びスタッフによる評価

まず、「研修開催の趣旨」が不明瞭であったというアンケートによる受講者の声があり、これに対して、法改正や新養成課程の説明だけではなく、そこで新たに求められる社会福祉士像と研修科目との関連を示す必要が確認されている。従って、「これから求められる社会福祉の役割」と「研修の開発経緯・全体像(各科目)」との関係を提示する講義等が必要になるとと思われる。

次にこれに関連することとして、研修の全体像を認識したうえで、各科目を学ぶことの意義を理解してもらうために、科目の順番や科目間の内容調整を行う必要が確認されている。内容の調整については、「地域福祉計画」についてより十分な時間が求められることが意見として挙げられており、何らかの方策が不可欠であると考えられる。

また、「コミュニティ」と「レジデンシャル」の分類で捉えた際には、「コミュニティ」の受講者には身近に感じられる内容ではあったが、「レジデンシャル」の受講者からすれば若干縁遠く受け止められている傾向が見受けられた。本来は、「コミュニティ」と「レジデンシャル」を峻別して学ぶものではなく、共通すべき部分を基盤にして進めていくべきものであるが、「レジデンシャル」の受講者の理解の促進の観点からみれば、「レジデンシャル」の内容を少し追加しておく必要があるのではないかという評価がなされている。今後、「レジデンシャル」の教材や事例等を講義部分に一定程度付加する必要があるものと考えられる。

運営方法については、オンライン研修を前提として考えた場合、受講者の集中力の持続性に問題が認められたため、講義ではなく、演習の時間を増やすこと休憩の時間と時機について見直す必要があるだろう。

相対的な評価としては、与えられた環境下における最適化を図る「機能主義的なアプローチ」のみならず、それらの環境変容を視野に入れた「構造主義的なアプローチ」の均衡のとれたカリキュラムであったという意見もみられた。

2) 研修会前後の受講者アンケートの結果

研修前後で改善度合いが顕著に表れたのは、「保護機能」・「調停機能」・「管理・運営機能」・「代弁・社会変革機能」・「組織化機能」・「調査・計画機能」の 6 つの機能であった。

日本社会福祉士会が 2019 年に上梓した「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士のソーシャルワーク機能の実態把握と課題分析に関する調査研究事業報告書」では、メゾ・マクロ領域における技術の不足が示されており、特に、「代弁・社会変革機能」の脆弱性が顕著であった。この点からみても、本研修は、ソーシャルワーク専門職である社会福祉士の養成に資するものであるといえるだろう。さらに言えば、「代弁・社会変革機能」・「組織化機能」・「調査・計画機能」は研修前には「あまり有していない」の割合が最も高かったのだが、研修後には「ある程度有している」の割合が最も高くなっている。

また本分析においては、「ソーシャルワーク機能」と「勤務先種別」のクロスにおいて一定の傾向が表れ

ている。「社協」でもっとも上昇した人が多かったのは、「保護機能」と「代弁・社会変革機能」であるのに対し、「高齢関係」では「調停機能」と「代弁・社会変革機能」、「障害関係」では「組織化機能」と「調査・計画機能」、「医療関係」では「調停機能」と「組織化機能」、「独立型」では「調査・計画機能」と「保護機能」、「管理・運営機能」といった具合にばらつきがみられた。このことは、本研修が受講者の所属先如何を問わず、ソーシャルワーク機能を高めることに寄与したことを示していると同時に、受講者の所属先によって研修の受け止め方が異なることを示している。

なお、「実務年数」のクロスにおいては顕著な変化が認められず、本研修が、実務年数の如何に抛らず、一定の効果をあげていることが示されている。

3)フォーカスグループインタビューによる評価

一つ目に着目すべき点は、社会福祉士の専門性や地域における展開の重要性への理解を深めつつも、特定の組織に所属する社会福祉士ができることの限界が語られていることにある。約 98%の社会福祉士が、なんらかの組織で雇用されている現状を鑑みれば、本研修の目的に整合する実践を敷衍するために不可欠なことは、組織がその目的を後押しするものとなるように、社会福祉士が組織に働きかけることである。この社会福祉士が組織に働きかける方法については、別途、検討する機会が必要であるように思われる。

次に、「社会福祉士の役割」と研修科目との関係がわかるような全体像があるとわかりやすいという指摘があった。まさに、「研修開催の趣旨」や目的がわかりにくいという評価である。これについては、「講師及びスタッフによる評価」でも同様の課題が挙げられており、新たな科目の創出等の検討が不可欠であると考えられる。

また受講者の実践領域が、「コミュニティ」であるのか、「レジデンシャル」なのかという違いにより研修の受け止め方が異なるとの分析結果が出ている。これは先のアンケート結果と符合する結果である。ここでは、「コミュニティ」の受講者は、「地域共生社会」を自らのこととして身近に捉えることができているが、「レジデンシャル」の受講者は、その方向性を模索する只中にあると受け止めることができる。この点においては、「レジデンシャル」の受講者に対して、その方向性に向けた実践を後押しする方策が必要であるといえよう。「レジデンシャル」の受講者に、その後押しをするための工夫を研修に加えなければならない。

加えて、事前課題を取り入れることで、受講者が自らの実践と関連させつつ研修に参加できるのではないかという意見があった。例えばそれは、「地域アセスメント」あたりで検討できるとの主張もみられた。所属先や経験年数の異なる受講者が、それぞれの実践に関係づけて学習を進めていくためにも事前課題の導入は検討に値するだろう。

最後に、オンライン研修及びハイブリッド形式の研修に対する言及が見られた点を確認しておきたい。まず、オンライン研修については、不慣れな感覚と新鮮さ、魅力、運用上の工夫の余地があることなどが語られている。具体的には、時間的かつ経済的に研修に参加しやすいという利点がある一方で、事前の動作確認の必要性やオンライン特有の疲れによる休憩時間の確保、名簿の共有等によって受講者同士がつながることができる仕組みの構築などの指摘が認められる。

ハイブリッド形式の研修にかかる発言としては、オンライン研修及び対面式研修にはそれぞれの利点と短所があることから、ハイブリッド方式で行ってはどうかというものがあつた。確かに、オンライン研修においては、上記の様な時間的・経済的効率性という利点がある一方で、疲労感や受講者間のつながりの希薄化などの問題があり、加えて、オンライン研修には参加できない人たちにも研修に参加してもらえる

機会を確保していく必要もあるだろう。以上のことから、オンラインと対面式研修の利点と欠点を整理したうえで、その両者の利点を少しでも引き出す形で、ハイブリッド方式の研修のあり方を模索することにも一考する余地があるように思われる。

以上の講師及びスタッフによる評価、研修会前後の受講者のアンケート結果、研修後の受講者によるフォーカスグループインタビュー結果をふまえると、当試行研修の全国展開に向けて、次の事項の検討が必要と考えられた。

- ・昨年度の研究実績をもとに今までの社会福祉士の役割・機能とは何が変わり、なぜ新しい内容を習得しなければならないか、どのようなことを新たに身につけなければならないか、ということを確認に受講者に示すことが必要なことから、研修プログラムの最初の科目に、当研修の全体像(研修目的、検討経緯、目指す新たな社会福祉士像や役割、当研修の構成等)の科目の追加を検討すること。
- ・科目間の繋がりやなぜその科目を学ぶ必要があるのか、その科目が研修全体の目的にどのようにアプローチしているのかを受講者に示すことが必要なことから、当研修の各科目と社会福祉士の役割の関係、各科目間の関係がわかるポンチ絵の作成(各科目の学びがどこに該当するか、受講者が常にわかるようにする)を検討すること。
- ・施設系社会福祉士にとっても地域共生社会実現に向けた新たな社会福祉士の役割が自身の実践に身近なこととして認識できるよう、科目内容や事前課題等による方策を検討すること。
- ・受講者が研修の全体像と各科目の繋がりを理解しそれぞれの科目を学ぶことの意義が理解しやすいよう、科目の順番や科目間の内容の調整を行うこと。
- ・地域共生社会の実現に向けて社会福祉士が役割を担うにはその地域での人的な繋がりが重要である。リモート方式は利点も多くあるが人的な繋がり構築には対面式の方がまさることから、研修運営のあり方としてハイブリッド方式を検討すること。
- ・オンライン研修を前提とするプログラムの場合は受講者の集中力が低下しないよう、講義の時間や休憩の時間を見直すこと。

第2章 現任社会福祉士に対する全国的な研修プログラム等の開発

2 全国展開に向けた研修プログラムの構築

(1) 試行研修をふまえた見直し

試行研修の結果をふまえて以下の事項の見直しを行った。

1) 研修の全体像を講義する科目の新設

試行研修は地域共生社会に実現に向けた社会福祉士の機能や役割を学び理解するための科目設定を行い開催したが、そもそもこの研修の意義や目的は何かということの説明をより明確に行うことで受講者のモチベーションが高まると考えられた。そこで、新たに研修の最初に当研修の目的や検討経過、新たな目指す社会福祉士像や役割、当研修の構成などを伝える科目「研修の全体像」を新設することとした。そして「研修の全体像」と「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」の内容が重複しないように調整を図った。

2) 共通スライドの導入

研修の全体像とも関係するが、それぞれの科目の学びが社会福祉士の機能や役割とどう関係しているか、科目間の繋がりがどうなっているか、これらのことを表すポンチ図を作成し、すべての科目の講義スライドに共通スライドとして導入することで、受講者が今何を学んでいるか、視覚的にわかるようにすることとした。このことによって、それぞれの科目が単独で存在しているのではなく、それぞれが関連していることの理解が進み受講者の学びを深められるようにした。

3) プログラム構成の見直しについて

当研修の全国展開に向けて、講義はオンデマンド方式の e-ラーニング、演習はハイブリッド方式(リモートもしくは集合形式)を前提とすることとした。このことにより、双方向の研修は 1 日プログラムで構成することが可能となり、多くの社会福祉士が拘束時間を最小限にして研修受講が可能となった。また、双方向であってもリモートによる受講の場合、長時間の継続は集中力が欠如しやすくなることから、こまめに休憩時間を設定することとした。一方、e-ラーニング講義も長時間の視聴は同様に集中力を欠くことから 40 分から 50 分程度の時間内に納めることとした。

各科目間のつながりは2)をふまえ科目の順番を再考した。特に連続して学んだ方が理解しやすい科目、例えば「排除をつくらない相談支援体制の構築」に続けて「アドボカシーと意思決定支援」としたり、「地域福祉の計画づくり」に続けて「地域アセスメントとネットワーク構築」としたりした。

また、各科目の講義と演習が別日程になるが講義と演習の繋がりを明確にし、講義で学んだ内容を演習に反映できるよう、各 e-ラーニング講義の最後のスライドに演習で行うことを示し、演習前の事前準備が行えるようにした。

4) 各科目について

各科目の講師及びスタッフによる評価、研修会前後の受講者アンケート結果、フォーカスグループインタビューの結果からそれぞれについて講義要綱や講義スライドの見直しを行った。見直しに際しての留意点としては、コロナ禍やアフターコロナを見据えてコロナ禍における事業の展開やリモートによる社会福祉実践に着目し、「アドボカシーと意思決定支援」「排除をつくらない相談支援体制の構築」の講義に ICT の活用への言及や、「社会資源の活用・開発」の講義にコロナ禍での資源開発にかかる事例紹介を含めた。また、試行研修の再議の科目「アクションプラン」はソーシャルアクションと勘違いした受講者が多いことから「研修の振り返りと明日からの実践に向けて」と名称を変更した。試行研修の「社会資源の活用と開発」は時間不足が明らかであったこと、また、福祉計画は独立した科目にしたほうが良いことから、新たに「地域福祉の計画づくり」を新設した。

5)事前課題について

フォーカスグループインタビューでは事前課題の必要性について多くの意見が挙げられた。特にレジデンシャルの方には今回の研修内容のイメージがつきにくいいため、自身の実践にひきつけて考えると事前準備になるのではないかとのことだった。そこで、研修プログラム全体を通しての事前課題として設定し、演習毎に書き込みを行い、最後の科目「明日からの実践」でとりまとめるようにして、研修の成果ともなるイメージとして、例えば、地域アセスメントにかかる事項を事前課題にしてはどうかとの意見が挙げられた。事前課題は研修の学びを深めるためにも重要であり、今後の検討課題とすることとした。

(2)研修プログラムと講義要綱

全国展開に向けた研修プログラムおよび各科目の講義要綱及び e-ラーニング講義のスライドを別掲する(159ページ～204ページ参照)。講義は e-ラーニングによるオンデマンドとし、演習はハイブリッド方式にした。

なお、e-ラーニング講義は日本社会福祉士会の e-ラーニングシステムで公開する。

テーマ 当研修の全体像とこれから求められる社会福祉士像（講義）

講義のねらい

- ・ 研修の開発経緯と全体像を理解する。
- ・ 日本社会福祉士会が考える「これから求める社会福祉士像」と「研修の全体像」との関連を理解する。

事前課題

なし

講義内容と講義のポイント（計 20 分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
本テーマの目標確認	・本テーマの目標	目標を確認する。	集合研修 (講義)	2分
研修の開発経緯	・新カリキュラムと旧カリキュラム ・地域共生社会の実現に不可欠な社会福祉士の機能と役割	本研修の開発過程について、5つのステップを示し説明する。特に、新カリキュラムと旧カリキュラムの比較検討と地域共生社会の実現に不可欠な社会福祉士像を想定して開発された経緯について確認する。	集合研修 (講義)	7分
これから求められる社会福祉士像	・ソーシャルワークのグローバル定義 ・2018年度社会福祉推進事業の要点 ・マクロレベルソーシャルワーク機能を発揮する促進要因	ソーシャルワークのグローバル定義を確認し、本来求められる社会福祉士像を確認する。そのうえで、2018年度に本会の個人会員を対象とした調査研究事業の結果をもとに、メゾ・マクロ領域及び専門職の価値・倫理の分野に不足が生じている点を指摘し、本研修が、これらを補うものであることを説明する。以上の検討をもとに、「社会福祉士の役割」と「研修科目」との関係を示す図を示して確認する。	集合研修 (講義)	8分
研修の全体像まとめ	・研修の4つの目標と全体構成	研修の4つの目標について確認し、研修受講後の流れも含めた全体像を示してまとめとする。	集合研修 (講義)	3分

テーマ 地域共生社会の意義、地域共生社会の実現において求められる機能（講義）

講義のねらい

- 地域共生社会の意義とその実現に向けた課題とともに、実現に向けて求められている機能を理解する。

講義内容と講義のポイント（計40分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本テーマの目標確認	・本テーマの目標	・目標を確認する。	リモート研修 （講義）	2分
・地域共生社会の意義	・地域共生社会とは ・地域共生社会の意義 ・地域共生社会の実現に向けた課題	・地域共生社会が必要とされる日本の現状をふまえ、地域共生社会の意義、及び、その実現に向けた課題を確認する。	リモート研修 （講義）	23分
・地域共生社会の実現において求められる機能	・地域共生社会の実現に求められる体制 ・体制構築の促進のために求められる機能	・地域共生社会の実現に向けて求められる体制やソーシャルワークの機能、及び、社会福祉士に求められる実践能力を確認する。	リモート研修 （講義）	15分

テーマ 地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク（講義・演習）

講義のねらい

- ソーシャルワークの観点から、地域共生社会の実現に向けて社会福祉士が果たすべき役割を理解する。
- 地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を果たすソーシャルワークの全体像を理解する。
- ミクロ、メゾ、マクロレベルのシステムの運動を踏まえた包括的なソーシャルワーク実践を理解する。

演習のねらい

- 演習による研修を始めるにあたり、リラックスして演習に参加し、それぞれの科目の目標を達成するのに必要なグループメンバー同士の関係を構築する。

講義内容と講義のポイント（計60分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本テーマの目標確認	・本テーマの目標	・目標を確認する。	e-ラーニング （講義）	2分
・地域共生社会のソーシャルワークの観点からの理解	・地域共生社会とソーシャルワーク専門職のグローバル定義 ・社会福祉士の役割	・グローバル定義から、地域共生社会の考え方と課題を説明する。 ・そのうえで、重層的支援体制整備事業における社会福祉士の役割を確認する。	e-ラーニング （講義）	15分
・ミクロ・メゾ・マクロレベルの総体としての実践	・ジェネラリスト・ソーシャルワーク ・交互作用 ・「個別課題解決に向けた実践」と「地域課題等の解決に向けた実践」の循環 ・制度・分野等横断したソーシャルワーク実践 ・スーパービジョン	・地域共生社会の実現に向けたソーシャルワークの全体像と留意点について説明する。 ・その際、社会福祉士による複数の事例をもとに作成した事例で説明する。 ・スーパービジョンの重要性に触れる。	e-ラーニング （講義）	20分
・まとめ	・目標の達成状況の確認	・本テーマの目標を達成できたかどうかを確認する。	e-ラーニング （講義）	3分
・アイスブレイク	・アイスブレイク	・演習を行うグループごとに分かれ、日頃果たしている役割を含む自己紹介を行う。	ハイブリッド （演習）	20分

テーマ 排除をつくらない相談支援体制の構築（講義・演習）

講義のねらい

- ・ 排除をつくらない相談支援およびその体制とはどのようなものなのかを理解する。
- ・ 「断らない相談支援」に必要な機能を理解する。
- ・ 排除をつくらない相談支援を実践するためには、どのような役割を、どのような方法で行えばよいのかについて検討する。

講義内容と講義のポイント（計85分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本科目の目標確認	・本テーマの目標	・目標を確認する。	e-ラーニング（講義）	5分
・排除をつくらない相談支援とは	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリで追加された新しいアプローチ ・排除をつくらない相談支援とは ・ソーシャルワークにおけるICT（情報通信技術）の活用 ・排除をつくらない相談支援体制の構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・新カリで追加された新しいソーシャルワークのアプローチ（ナラティブアプローチ，解決志向アプローチ）の概要を理解する。 ・排除をつくらない相談支援として，分野横断的な支援体制，断らない支援体制の方法について理解する。 ・排除をつくらないソーシャルワークとしてICT（情報通信技術）を活用する必要性を理解する。 ・「システム」として排除をつくらない相談支援体制を構築していく重要性を理解する。 	e-ラーニング（講義）	35分
・排除をつくらない相談支援の実践	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉士の役割 ・ソーシャルワークの新しいアプローチ ・アウトリーチ，リファー（繋ぐ） ・チームアプローチ（多職種連携） ・スーパービジョン ・伴走型支援 ・ICT（情報通信技術） 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義内容と実践をふまえたグループディスカッションを行う。 ・排除をつくらない相談支援を実践するために，社会福祉士が果たさなければならない役割およびの方法をグループで検討する。その後，全体共有しながら，役割や方法について確認する。 	ハイブリッド（演習）	45分

テーマ アドボカシーと意思決定支援（講義・演習）

講義のねらい

○地域社会の実現に向けて、

- ・ソーシャルワーク実践の根幹であるアドボカシーの意味をあらためて理解する。
- ・本人の意思を尊重する支援のあり方について、参加支援と本人を取り巻く環境を視野に入れた権利擁護の視点から理解する。

講義内容と講義のポイント（計85分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本科目の目標確認とアドボカシーの内容	・本テーマの目標 ・アドボカシーとは何か	・アドボカシーの意味を確認する。 ・アドボカシーの種類を説明する。	e-ラーニング（講義）	10分
・意思決定支援	・意思決定支援とは何か	・意思決定支援をめぐる動向を確認する。 ・参加支援と本人を取り巻く環境を視野に入れた意思決定支援のプロセス・展開を確認する。 ・ICTを活用したアドボカシーと意思決定支援の可能性を考える。	e-ラーニング（講義）	30分
・実践をふまえたふりかえりとまとめ	・実践をふまえたアドボカシーと意思決定支援の可能性 ・アドボカシー・意思決定支援と社会福祉士	・講義内容と実践をふまえたグループディスカッションを行う。 ・本科目の目標を達成できたかどうかを確認し、社会福祉士としてアドボカシー・意思決定支援をとらえる視点を確認する。	ハイブリッド（演習）	45分

テーマ 地域で支える体制の構築（講義・演習）

講義のねらい

- 新カリキュラムでの学びを自らの実践に活かすことができるよう、知識構築・力量形成を促す。
- 地域共生社会の実現に向けて、
 - ・支える主体への理解ならびに地域住民が主体として重要であることへの理解を促す。
 - ・地域で支える体制の構築に向けた社会福祉士の機能と役割についての理解を促す。
 - ・地域住民が主体として役割を果たすためには福祉教育が重要であるため、それについて理解を促す。
 - ・多機関、多職種、福祉以外の機関との協働についての理解を促す。
- 参加支援（社会とのつながりや参加の支援）ならびに「地域やコミュニティにおけるケア・支え合う関係性の育成支援」に向けての力量を形成する。

講義内容と講義のポイント（計85分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本テーマの目標確認	・本テーマの目標	・本テーマの目標を確認する。	e-ラーニング（講義）	5分
・地域で暮らす人々の生活とソーシャルワーク	・地域とは、地域で暮らすとはどういうことか ・ソーシャルワークの展開する空間としての「圏域」とは ・社会福祉法で規定する「地域生活課題」とは	・地域概念。 ・地域で暮らすということへの理解を促す。 ・ソーシャルワークの展開を見据えた「圏域」「圏域設定」についての理解を促す。 ・「地域生活課題」の法的規定および多様な主体の協働を促すソーシャルワーカーの機能	e-ラーニング（講義）	7分
・地域住民との協働による地域共生社会の推進	・地域福祉の推進主体としての住民 ・多様な主体との協働 ・地域共生社会の実現をめざした支援体制	・地方自治体、NPO、社会福祉協議会、企業などが協働する支援体制への理解を促す。 ・当事者/代弁者、ボランティア、住民などの役割への理解を促す。 ・その連携や協働と意義についての理解を促す。	e-ラーニング（講義）	15分
・地域福祉の推進と福祉教育	・福祉教育の概念 ・福祉教育の目標と展開 ・福祉教育の意義	・地域住民の主体形成の重要性に関する理解を促す。 ・福祉教育の概念や目標、その展開方法への理解を促す。 ・福祉教育の意義への理解を促す。	e-ラーニング（講義）	5分
・多様な主体が協働するまちづくりへ	・多機関との協働 ・多職種との協働 ・福祉以外の機関との協働	・保健、医療との協働。 ・企業、商工、観光、農福連携等との協働への理解を促す。	e-ラーニング（講義）	5分
・まとめ	・本講義の重要ポイントを示す	・講義の内容の確認や、重要ポイントを再度提示することで、受講者	e-ラーニング（講義）	3分

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
		の理解促進をはかる。		
・演習・「3つの支援」で支援体制構築を考えましょう	・自らの担当地域における「3つの支援」	・自らの担当地域を例として、「相談支援」「参加支援」「地域づくりに向けた支援」に当てはめ、必要な支援を考える	ハイブリッド（演習）	45分

テーマ 地域福祉の計画づくり (講義)

講義のねらい

- 新カリキュラムでの学びを自らの実践に活かすことができるよう、知識構築・力量形成を促す
- 地域共生社会の実現に向けて、
 - ・福祉計画の全体像および各々の計画の有機的なつながりを理解する。
 - ・地域福祉計画の策定体制・方法を学ぶ。
 - ・社会福祉法における地域福祉計画の規定および法改正による変更点への理解を促す。
 - ・住民が計画策定に参加することの意義およびソーシャルワーカーによる策定支援を学ぶ。
- 参加支援（社会とのつながりや参加の支援）ならびに「地域やコミュニティにおけるケア・支え合う関係性の育成支援」に向けての力量を形成する。

講義内容と講義のポイント (計40分)

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本テーマの目標確認	・本テーマの目標	・本研修における本テーマの位置づけおよび目標を確認する。	e-ラーニング (講義)	5分
・福祉計画の意義と策定、運用	・地域福祉を推進する多様な福祉計画 ・地域福祉計画(行政計画としての地域福祉計画と社協計画としての地域福祉活動計画)	・フォーマル、インフォーマルな計画の全体像およびそれらの有機的な関係、運用方法について学ぶ。 ・市町村の計画、都道府県の計画、社協の計画の関係を理解する。	e-ラーニング (講義)	5分
・地域福祉計画の策定体制・方法	・住民参加・当事者参加を重視する地域福祉計画の策定体制・方法	・策定委員会、ワークショップ等の参加型策定手法の考え方と実際を知る。	e-ラーニング (講義)	7分
・地域共生社会の実現に向けた地域福祉計画の法的位置および盛り込むべきもの	・地域福祉計画の社会福祉法における規定 ・地域共生社会に向けた法改正において、地域福祉計画にかかわる変更点	・社会福祉法第107条・第108条の規定および改正による変更点を学ぶ。 ・改正の背景やねらいを理解する。	e-ラーニング (講義)	15分
・住民主体の行動計画	・住民が主体となって策定するインフォーマルな行動計画	・住民が自らの暮らす地区の問題・ニーズについて協議し、行動計画を立てることの大切さやその方法を学ぶ。	e-ラーニング (講義)	5分

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
<ul style="list-style-type: none"> ・まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ・本講義の重要ポイントを示す 	<ul style="list-style-type: none"> ・講義の内容の確認や、重要ポイントを再度提示することで、受講者の理解促進をはかる。 ・地域福祉を推進する諸計画において重視される住民参加・当事者参加の促進のため、ソーシャルワーカーに求められる視点と方法を理解する。 	e-ラーニング (講義)	3分

テーマ 地域アセスメントとネットワーク構築（講義・演習）

講義のねらい

○地域共生社会の実現に向けて、

- ・個人への支援だけではなく、地域づくりに向けた支援を視野に入れ、地域住民や他の専門職との協働・連携し、顕在化していない課題にアプローチすることの意義について理解する。
- ・断らない相談支援という視点から、地域アセスメントとネットワーク構築について理解する。

講義内容と講義のポイント（計 85 分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本科目の目標確認と地域アセスメント	・本テーマの目標 ・地域アセスメントとは何か	・本科目の目標を確認する。 ・地域の課題にアプローチすることの意義を確認する。 ・ネットワーク構築を前提とした地域アセスメントの視点を説明する。	e-ラーニング (講義)	20分
・ネットワーク構築	・ネットワーク構築	・地域にネットワークを構築することの意義を確認する。 ・ネットワーク構築の視点と方法について確認する。	e-ラーニング (講義)	20分
・実践をふまえたふりかえりとまとめ	・実践をふまえたネットワーク構築の可能性 ・本科目の目標と地域における社会福祉士	・講義内容及び実践をふまえたグループディスカッションを行う。 ・本科目の目標を達成できたかどうかを確認し、社会福祉士として地域をとらえる視点を確認する。	ハイブリッド (演習)	45分

テーマ 社会資源の活用・開発 (講義・演習)

講義のねらい

- 新カリキュラムでの学びを自らの実践に活かすことができるよう、知識構築・力量形成を促す
- 地域共生社会の実現に向けて、
 - ・社会資源の概念についての正確な理解を促す。
 - ・社会資源を活用・開発することの意義についての理解を促す。
 - ・社会資源を活用・開発する方法についての理解を促す。
- 参加支援(社会とのつながりや参加の支援)ならびに「地域やコミュニティにおけるケア・支え合う関係性の育成支援」に向けての力量を形成する。

講義内容と講義のポイント (計85分)

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本テーマの目標確認	・本テーマの目標	・本研修における本テーマの位置づけおよび目標を確認する。	e-ラーニング (講義)	5分
・導入	コロナ禍における資源開発の取り組み	・新型コロナウイルス感染拡大によって地域福祉活動が制約される中、公私主体による開発的な実践事例をもとに、非常時下の資源開発を学ぶ。	e-ラーニング (講義)	5分
・社会資源活用・開発がなぜ必要なのか	・資源活用・開発が必要とされる今日の背景 ・既存資源の活用と新たな資源の創出 ・資源活用・開発における柔軟な視点・方法 ・価値や行動変容を促す資源開発	・ソーシャルワーカーの技術としての資源活用・開発が求められる背景を知る。 ・資源活用・開発のさまざまな方法への理解を促す。	e-ラーニング (講義)	5分
・社会資源の種類と活用・開発の方法	・社会資源のとらえ方・類型 ・さまざまな資源活用・開発の方法	・社会資源および資源活用・開発の方法にはどのようなタイプがあるかを理解する。 ・さまざまな資源活用・開発の事例を知る。	e-ラーニング (講義)	10分
・資源開発の事例	・既存資源を使った居場所づくりの事例	・商店街の空き店舗を使った「Cサロン」の立上げの事例から、資源活用・開発の一連の援助技術(地域アセスメント、資源活用・開発、ネットワーキング等)を学ぶ ・事例は演習の素材とする	e-ラーニング (講義)	10分
・まとめ	・本講義の重要ポイントを示す	・講義の内容の確認や、重要ポイントを再度提示することで、受講者の理解促進をはかる。	e-ラーニング (講義)	5分

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
<ul style="list-style-type: none"> ・演習・社会資源活用・開発に求められる視点とスキル-Cサロンの事例から- 	<ul style="list-style-type: none"> ・Cサロン(上述)の立上げ支援の事例を検討する ・事例におけるポイントを抽出する(個人) ・それを他者と共有し、さまざまな視点やアイデアを学び合う(グループ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・Cサロンはソーシャルワーカーが商店街等関係者と協議しながら立ち上げた拠点である。地域のニーズをアセスメントし、資源開発していく視点や方法を、事例のプロセスから学ぶ 	ハイブリッド (演習)	45分

テーマ ソーシャルアクション（講義）

講義のねらい

- 地域共生社会の課題等に対処するために、ソーシャルアクションを実践する必要もあることを理解する。
- 当事者のエンパワメントを基本とし、社会的に不利な立場におかれている人びとに支援することが、社会的に認められている専門職である社会福祉士だからこそできるソーシャルアクションの方法を理解する。

講義内容と講義のポイント（計40分）

テーマ	項目	講義のポイント	研修形態	目安時間
・本テーマの目標確認	・本テーマの目標	・目標を確認する。	e-ラーニング (講義)	2分
・ソーシャルアクションとは	・ソーシャルアクションの定義 ・ソーシャルアクションの説明要素	・ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションとは何かを説明する。	e-ラーニング (講義)	10分
・地域共生社会の実現におけるソーシャルアクションの意義	・地域共生社会におけるソーシャルアクションの意義	・「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク」で確認した、地域共生社会の課題等をふまえて、ソーシャルアクションの意義について説明する。	e-ラーニング (講義)	5分
・ソーシャルアクションの実践方法	・地域共生社会に向けたソーシャルアクションの実践方法	・社会福祉士の実践事例等を紹介しながら、ソーシャルアクションの実践方法を説明する。	e-ラーニング (講義)	20分
・まとめ	・目標の達成状況の確認	・本テーマの目標を達成できたかどうかを確認する。	e-ラーニング (講義)	3分

テーマ「研修の振り返りと明日からの実践に向けて（演習）」

演習のねらい

- e-ラーニング視聴や講義内容をふまえ、地域共生社会の実現に資するソーシャルワーク機能を発揮するために明日から何を取り組めば良いのかを明確にする。

演習内容と演習のポイント（計 60分）

テーマ	項目	演習のポイント	研修形態	目安時間
研修の振り返りと明日からの実践に向けて	本テーマの目的・演習手順についての説明	演習要綱を基に目的・手順について説明する。	リモート研修（演習）	5分
	「2日間の研修を踏まえて、明日からの実践で何ができるのか？」についてのディスカッション	「2日間の研修を踏まえて、明日からの実践で何ができるのか？」についてグループ内で議論する。	リモート研修（演習）	30分
	グループ発表&まとめ	グループごとに議論した内容についてプレゼンテーションを行い、講師がそれに対してコメントする。発表グループ数は、時間の範囲内で講師が調整する。	リモート研修（演習）	25分

主催:公益社団法人 日本社会福祉士会
「地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク実践力養成研修」

当研修の全体像と これから求められる社会福祉士像

社会福祉法人 地域の空
特定非営利活動法人 地域の絆
理事長/代表理事 中島 康晴

研修の開発経緯

研修開発の背景

日本社会福祉士会(2020)「現任社会福祉士に対する実践力向上のための育成等に関する調査研究専報報告書」

現在、社会福祉士養成カリキュラムが改正され、2021年度から導入される予定であるが、(中略)実践現場で働いている社会福祉士がカリキュラム改正等において求められる新たな役割を果たしていくためには、既存の現任社会福祉士養成・研修プログラムを新養成カリキュラムに対応させた見直しを行い、実践力向上にむけた体制整備に取り組むことが急務となる。

研修開発5つのステップ

日本社会福祉士会(2016)「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士のソーシャルワーク職能の 実務範囲と領域分野に関する調査研究専報 報告書JP-117」

- Step1
 - ・新旧カリキュラムの比較及び「地域共生社会」に向けて現任社会福祉士に必要な項目の抽出。
 - ・「研修プログラムに含めるべき項目」とキーワードの検討。
- Step2
 - ・「中間とりまとめ」と「専門委員会報告書」を比較。
 - ・「地域共生社会」に向けて現任社会福祉士に求められる「社会福祉士の役割・機能」を確認。
- Step3
 - ・「研修プログラムに含めるべき項目」と「社会福祉士の役割・機能」(Step2)を比較し整合性を確認。
- Step4
 - ・「研修プログラムに含めるべき項目」と「ソーシャルワーク23の機能」を比較し整合性を確認。
- Step5
 - ・「研修プログラムに含めるべき項目」と「最終とりまとめ」(3つの機能と関連するキーワード)との整合性を確認。

これから求められる 社会福祉士像

ソーシャルワーク(専門職)のグローバル定義

2016年7月オーストリアのメルボルンで、国際ソーシャルワーク一連連(IFSW)と国際ソーシャルワーク学校連連(IASSW)において採択

ソーシャルワークは、社会変革と社会開発、社会的結束、および人々のエンパワメントと解放を促進する、実践に基づいた専門職であり学問である。社会正義、人権、集団の責任、および多様性尊重の諸原理は、ソーシャルワークの中核をなす。ソーシャルワークの理論、社会科学、人文学、および地域・民族固有の知を基盤として、ソーシャルワークは、生活課題に取り組みウェルビーイングを高めるよう、人々やさまざまな構造に働きかける。この定義は、各国および世界の各地域で展開してもよい。

2018年度社会福祉推進事業の要点

日本社会福祉士会(2018)「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士のソーシャルワーク機能の発揮形態と課題分析に関する調査研究報告 報告書」

- ◆マイクロレベル(側面的援助機能、代弁機能、直接支援機能、教育・指導機能、保護機能、仲介機能、調停機能、ケア(ケース)マネジメント機能)では、約8割の社会福祉士が技術を有し実践していると回答。
- ◆メゾレベル(管理・運営機能、スーパービジョン機能、ネットワーク(連携)機能)では約5割の社会福祉士が技術を有し実践していると回答。
- ◆マクロレベル(代弁・社会改革機能、組織化機能、調査・計画機能)では約3割の社会福祉士が技術を有し実践していると回答。

マクロレベルソーシャルワーク機能 機能を発揮する促進要因

日本社会福祉士会(2018)「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士のソーシャルワーク機能の発揮形態と課題分析に関する調査研究報告 報告書」P.118

マクロレベルソーシャルワーク機能を発揮する促進要因に着目すると、職能団体との関係性(相関係数0.29)、ソーシャルワーク専門職としての自律性(相関係数0.39)、関係する専門職ネットワーク(相関係数0.32)、地域住民との関わり(相関係数0.47)、ソーシャルワークの価値・倫理(相関係数0.50)が重要な要因となっていることが示唆されている。

「価値・倫理」と「地域住民との関わり」がマクロSWの促進要因となる可能性が示唆

価値と倫理の不在が 「社会変革」とジレンマを低減させる

日本社会福祉士会(2018)「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士のソーシャルワーク機能の発揮形態と課題分析に関する調査研究報告 報告書」P.90-91

日本社会福祉士会が会員を対象とした調査によれば、「人権・社会正義について調べた経験」「人権・社会正義について議論をした経験」がある者は其々49.0%・38.0%に留まっていた。加えて、「倫理的ジレンマについて悩んだ経験」があると答えた者は58.4%となっている。このジレンマにかかる数値の多寡については、もちろん評価が分かれるだろう。ただし、新自由主義が伸張し、効率性と生産性が過度に要求されている社会構造におけるソーシャルワークの展開には、その目的・価値との乖離が甚だしく、ジレンマが常に付随していることが本来の姿ではなからうか。そう考えれば、この数字はむしろ低いと言わざるを得ない。

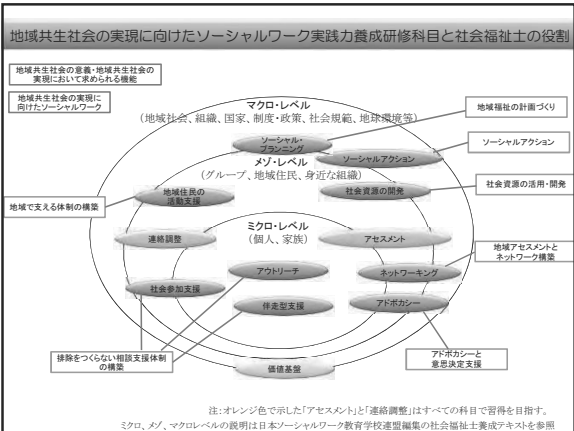
因みに、「ソーシャルワークのグローバル定義を読んだ経験」については、あると答えた割合は40.4%でしかなかった。

組織に雇用されるソーシャルワーカー

「社会福祉士・介護福祉士就労状況調査結果の実態概要」「精神保健福祉士就労状況調査結果の実態概要」2016年2月 公益財団法人社会福祉協議会・試験センター

多くのソーシャルワーカーは、社会福祉関連法の枠組みの中で仕事をしている。そして、その制度に基づいた事業を運営する組織に被雇用者として所属している。

社会福祉士の「経営者」は2.1%であり、「施設長・管理者」が13.3%、「その他」「無回答」が12.1%であった。精神保健福祉士においても、「経営者」は1.9%であり、「施設長・管理者」が12.2%、「その他」「無回答」が16.8%であった。社会福祉士・精神保健福祉士ともに、雇用者としては、「経営者」と「施設長・管理者」の一部が含意されていると思われる。



研修科目の全体像

地域共生社会の実現に向けた社会福祉士の役割を理解し、自分の実践につなげて考えることができる

【事前学習】地域共生社会の意義・地域共生社会の実現において求められる機能・地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク

地域住民と社会資源の関係形成する際の課題と、社会福祉士として必要な対応について理解できる

【事前学習】地域共生社会の実現に向けたソーシャルワーク・地域福祉計画【講義・演習】地域アセスメントとネットワーク構築・排除をつくらない相談支援体制の構築・社会資源の活用・開発

生活問題を抱えている(意識していない人も含む)人々に寄り添い、個人の支援だけでなく、地域にも視点に向けた地域づくりの支援が必要であることを理解できる

【事前学習】ソーシャルアクション【講義・演習】地域アセスメントとネットワーク構築・地域で支える体制の構築

利用者から複合化、複雑化した相談を断ることなく、適切に対応するために、必要に応じて他機関と連携することを理解することができる

【事前学習】アドボカシーと意思決定支援・地域福祉計画【講義・演習】排除をつくらない相談支援体制の構築・地域で支える体制の構築・社会資源の活用・開発

全体を振り返り自らの実践に生かすべき事柄を検討する

【演習】研修の振り返り及び明日への実践に向けて

研修後

スーパービジョンの活用・生涯研修に基づく継続研修の受講

包括的な相談支援体制及び住民主体の地域課題解決体制を構築するための実践力を高める